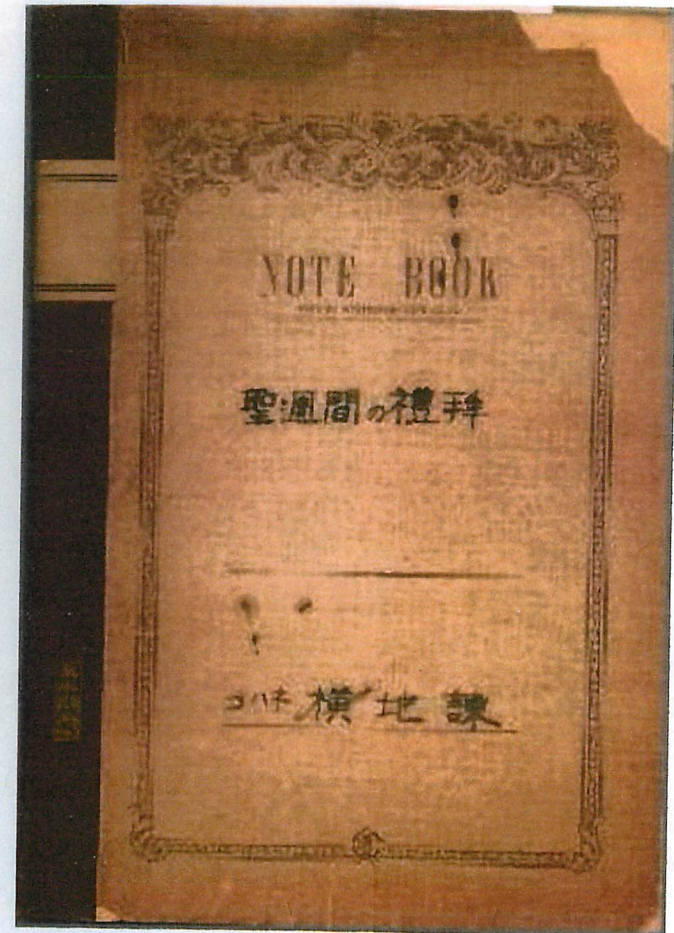


聖週間の禮拜

ヨハネ 横地 諫



(牛込聖公会聖バルナバ教会所蔵)

聖週間の禮拝

第一章 緒 論

第二章 初代教会の聖週間

1. 序 文
2. 復活日を定めたる問題
3. 復活日に洗礼を施した習慣
4. 洗礼式以外の特別礼拝

第三章 東方教会の聖週間 (4~10 世紀)

1. 序 文
 2. 洗 礼 式
 3. その他の儀式
 - (1) 棕櫚の日曜日 (4) 聖金曜日
 - (2) 聖月、火、水曜日 (5) 聖土曜日
 - (3) 聖木曜日 (6) 復活日
- 油の聖別式 ○洗足式

第四章 西方教会の聖週間 (4~10 世紀)

1. 序 文
2. 洗礼式
3. その他の儀式
 - (1) 棕櫚の日曜日 (5) 聖土曜日
 - (2) 聖月、火、水曜日 ○火及びローソクの祝別式
 - (3) 聖木曜日 ○香の聖別式
 - (4) 聖金曜日 (6) 結論

第五章 ガリカンの聖週間

1. 序 文
2. 洗礼式
3. その他の儀式
 - (1) 棕櫚の日曜日 (4) 聖金曜日
○十字架の崇敬式
 - (2) 聖月、火、水曜日 (5) 聖土曜日
 - (3) 聖木曜日 (6) 復活日

第六章 英国に於て聖週間の礼拝改正—改革時代

1. 序 文
2. 1549年の祈祷書
3. 1552年の祈祷書
4. メリー女王の五年間 (1553~1558)
5. エリザベス女王の時代
6. 1661年の祈祷書

第七章 オックスフォード運動と聖週間礼拝

1. 18世紀の英国の宗教
2. 19世紀の英国の宗教

第八章 結 論

用語について

西方教会に於いては5世紀より Liturgy をミサと呼んだ。聖公会は、西方の流れを汲むところからこのミサの術語を用ふことにした。

聖餐式の代わりにミサの術語を用いた。

次に、信徒按手式の代りに堅信式を使用した。

Confirmation は、確かに堅信の意味を蔵しているようである。

また、聖職位名の主教・司祭・執事中の執事を補祭にした。

この術語は前者よりもその職位を明示するように思はれる。

内容の一部変更と解説文挿入について (転写者)

大変なご労作に手を加えるなど傲慢の誹りを避けられないと感じつつも明らかな誤記や歴史経過の不明な点は加筆・訂正をさせていただいた。

また、学習者の便宜のため最小限度の解説を挿入いたしました。

第一章 緒 論

日本聖公会の祈祷書(1939年祈祷書)には、早晚祷以外に聖週間に於ける毎日のミサ式文が記載されている。

改革時の改正に於いては、主日と大聖日の式文以外、週日 Feria の特別式文は悉く除去されてしまった。

併し聖週間の一週間 Feria の式文だけは護られている。

改革者達がこの式文を保存した原因は、この一週間は昔より大切にしていた為である。

東方教会に限らず、ロマの missal 祈祷書にもこの一週間を主なる一週間 (Hebdomeda major) と云い、東西両教会とも、この一週間を大週間と呼んだ。

現在に於いても尚、東方教会はこの週間を大週間と呼び西方教会は聖週間と呼ぶようになった。

この一週間の礼拝は復活祭の準備礼拝である。

復活祭は他の何れの祭日よりも最大、最高の祭であって、初代よりユダヤ人の過越節 Paschal の如くその後の一週間も祭として守った。

聖週間を研究するとき、聖週はその後の一週間の準備であることを忘れてはならない。

改革時代より聖公会の祈祷書には復活の Octave の月曜日と火曜日の特別式文だけが保存された。

併し最近の改正に於いて、その一週間に亘り特別式文を挿入するように成った事は注意すべき事である。(英国祈祷書 1928年改正)

古代より東西両教会ともにこの二週間の礼拝式文は公会暦の他の礼拝式文と違ひ、この二週間全部を復活の祭と言っていた。

即ち "Paschalia solemnitas" と云った。

この二週間、信徒は毎年、キリストの苦難と死及び復活により救いを得たことを記念する。

勿論、この二週間の性質を深く考える時は、両者の間に大なる差異を認める。

即ち、聖週間は公会暦中もっとも寂しい週間であり、復活の Octave は最高の歓喜に満ちた週間である。

聖週中の最後、聖土曜日に十字架(苦難)の悲しみから復活の歓喜に遷(うつ)る、その変化の中心は微妙である。

「キリストは苦難を受けてその栄光に入る」(ルカ 24:26)とあるが全くその言葉の通りである。

復活の祭が最も大切に扱われる所以は、イエスの生涯に於ける事実を詳細に記念することよりも、復活の事実によって我ら信徒が贖いを受けた結果、復活を大切にする。

キリスト教の根本教理は、神の唯一性以外にキリストの犠牲によって我ら人類が贖いを受けたことである。

この贖いを受けるためにはキリストの復活が必要である。

若し主キリストの復活が無かったとすれば我々はその苦難の実を受けることはできなかった。

故に教会は我々の罪の贖いの為に十字架と共にこの復活の祭を大切に扱ふのである。

使徒達の教えは、十字架につけられた主キリストと復活された主キリストを第一の事実として語ることであった。

ミサ式文の聖別祷の中にある聖業記念文(*聖餐制定語 Anamnesis)の中に昔より次の言が使用されている。

即ち「御子イエス・キリストの尊き死と苦しみ及び栄光ある復活と昇天を記憶し...」

故に教会は斯の如き事実を公会暦の最も大切な祭とし、復活祭を他の降誕祭や聖霊降臨日等の祭よりも一層厳粛かつ重大視するわけである。

この復活の祭は、春の第一の満月の次の日曜日に当てられ、棕櫚の日曜日 Palm Sunday より復活後第一主日 Low Sunday まで続けて守られる。

復活祭の Octave は、聖週と比較すれば礼拝式文には余り変化はない。

併しこの二週間は一つの祭として認められる。

聖週間に就いて云へば、この週間の悲しみはその前の一週間に移されているようになっている。

即ち、大斎節第5主日の式文は、主イエスの苦難の内容で使徒書はイエスが犠牲になった内容、次に福音書はイエスがユダヤ人に苦しめられ始めた記事で、特に苦難の日曜日の名称がある。(* Passion Sunday)

今日、天主教会(*ローマカトリック教会)の習慣はこの苦難の日曜日より特別に悲しみを呼び起こし、聖堂内の聖画、聖

像、及び十字架を覆物をもって隠す。(セーラムの習慣はこの覆物を大斎始日より用いた。)

この苦難の日曜日より復活前日迄の二週間を特に苦難節 Passion tide と言う。

[聖公会で出版された或る書に、この苦難節を受難週としてあるのを発見した。即ち「聖週を又受難週とも云ふ...」と passion tide 苦難節という二週間は有るが、受難週と云ふ用語は欧州に置いても注意がされている。

Liturgy and Worship p.207]

大斎第6主日になり、聖週の特別な悲しみの初まりとして主イエスのエルサレム入城を記念する式が行われる。

この棕櫚の行列に於いて「ダビデの子にホザナ」と歌う。

この時には他の統べてのこと(悲しみ)を忘れてしまう。

若しこの主日が他の聖日に重なっても、その聖日は無視されて記念せず、二週間の間は只管(ひたすら)に主イエスにだけ従うのである。

理想的に言って、この二週間を静想日の如く守る事ができれば望ましいことである。

併し俗世間の信徒は、なかなか理想通りに行くことは困難なことで残念である。

教会がこの二週間の間、毎日、特別礼拝を定めた理由は、我々が常に主イエスと共にあることを覚え、主によってのみ統べての事がなし得られることを悟るためである。

「主は実に甦りてシモンに現れ給えり」(ルカ 24:34)の記録は誠に澆瀾と生氣に満ち溢れた語である。

また、「人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、且つ三日目に甦るべし」と仰せられた主イエスは正しくその御言葉の如くカルバリ山上に於いて贖いの十字架に尊き御生命を提供された。

その後、御墓に葬られたが三日目に御墓より甦り給うた。

最初に三人のマリア達に現れ、次にエマオ途上に現れ、又、ペテロやヨハネにも現れ給い、パンを擘き、御弟子達にキリスト御自身であることを御示しになられた。

更に弟子達に「汝らは此等の事の証人なり」と仰せ給うたのである。

原始キリスト教の歴史を繙(ひもと)く人々は、主イエス

の御復活の事実が文字通り驚くべき出来事として人々の間に大いなる衝動を惹起し、又、主イエスの弟子達がその瞬間より生々とした姿にある自己を発見するに至り、活発な傳道運動が烽火(のろし)を挙げて光榮ある復活の証人となったかを伺い知ることができよう。

我々は現在もその情景を新約聖書の中に見出すことができる。

我々も混沌たる現在の社会に於いてキリストの御復活を教え使徒達の如く、心の中に平安と力を得て、生々とした姿でキリストの証人となるよう勵(はげ)まねばならない。

昔より公会は、主キリストの復活の日を暦の最高首位に置き、感謝讚美の日とした。

そしてこの日を毎年守り続けて来た事は当然なことである。

ひと言すればこの文は聖週間の特別礼拝研究が目的である。

第二章 初代教会の聖週間

1. 序 文

イエスの弟子達は前章に述べたようにキリストの復活の証人となり、その説いた教えは確かにキリストの復活であった。

キリストの復活の一の強大な証明はこれ等のユダヤ人即ち主イエスの弟子達が古来より守り来った安息日を次第に廃し、キリストの復活を記念するため「一週的首(はじめ)の日」即ち日曜日を復活の記念日として守るようになった事である。

聖書の記事によればキリストの復活後50日目の日曜日の朝の集会に於いて、その会衆は皆聖霊を受けた。

またパウロはトロアスに於いてひと週りの首(はじめ)の日に弟子達にパンを擘いた事実があり、尚「一週りの首の日ごとに…」(コリント前書 16:2)とある記事によって当時の信徒達は規則的にこの日に集まった事が領(うなず)かれる。

この日曜日を守る事は主の復活を記念する公会の大祝祭日であり、年毎に祝う復活祭の延長であった事は確かである。

- 注意すべき事は、日曜日は安息日にあらずと言うことである。現在、信徒間に時折この二つを混同する人々を見受けるが、これは大きな誤りである。「汝、安息日を聖として忘るる勿れ」と十戒を厳守したのは昔のユダヤ人達で、我々基督者は斯かる律法を守る義務は負わされてない。更に年毎に一度、即ち春のこの日に特別に主イエスの復活を記念するようになった。初代教会に於いては特別の復活祭のあった証拠はない。しかし、その後の習慣を見ると相当早い時代に既にあった事が領かれる。

2. 復活記念日を定める問題

第一世紀の終り頃までに復活の特別の祭は方々で行われた。

併し、この習慣ができた。

即ち大部分はこの復活祭を日曜日に守ったが、小アジア

の地方に於いてはニサンの14日（ユダヤ人が過越節に羊を殺す日）に守った。

アイレニアスは、この後者の習慣は使徒ヨハネより受け継いだ習慣であると云ふ。（Eusebius H.E.V. 12,24）

紀元115年頃、クリスタス Xrystus 一世教皇の時、上述の小アジアの習慣が行われていた事が判明した。

190年ビクトル Victor 教皇は、この為、遂に quarto-deciman を排撃した。（アイレニアスはこれに反対した。）

遂に紀元325年ニケア会議に於いて復活祭日は日曜日に決定した。

教会は初めユダヤ人の過越祭を定める方法に従っていた。

併し、ユダヤ人の暦は月の暦であって、ローマ帝国は太陽暦を用いていたため、その両者間に種々の誤差を生じ基督者は次第に自分達の規則を作るに至った。

紀元222年ヒッポリタスは復活日を定める規則を作った。（この規則は1551年ラテランナ博物館で発見されている。即ちヒッポリタスの彫像に記銘されている。

Liturgy and Worship p205）

即ちその規則はその時代の科学に従って復活の祭日は春期皇帝祭の後の満月と定めた。

併し、この表には沢山の間違いがある。

この誤りについては、アレキサンドリアの大学では訂正している。

アウガスチンが英国に渡った時、元のケルティク教会との間にこの問題で争いが起きた。現在はグレゴリアン・カレンダーに従っているが、実際の満月と教会の定めたる満月との間には3日の差異を生ずることもある。

二十世紀に於いては古代の思索なく、又暦の便宜上、太陽暦による運動が勃興してきた。

即ち1926年国際連盟の或る委員は四月の第二日曜日を復活日と定める提案をした。

併し教会は一定の権威者がなくこれを決定することは困難である。（Liturgy and Worship p205）

復活祭日は実に移動祝日であって、種々論争がある。

日本聖公会の祈祷書は325年ニケア会議で決議された定

め方を教示する。

即ち、「復活日は3月21日以後の満月に次ぐ主日なり。若し満主日に当らばその次の主日は即ち復活日なり」と

3. 復活日に洗礼を施した習慣

上述の如く、第一世紀頃より過越節に近き日に、主の復活は守られた。

この祭に於いて東西両教会共に洗礼式を施行した。

後年になり東方教会に於いては現異邦日（顕現日）にも洗礼式を施し、西方教会に於いては聖霊降臨日にも洗礼を施すに至ったが、普通は復活日に洗礼式を行った。

これは復活の前に洗礼志願者が特別準備をなした為である。（テルトリアン：De Baptisma C.19 c.200年）

この準備のために大斎節を守る習慣ができ始めたと思われる。

洗礼を復活日以外に施す習慣のできたのは大分後日の事である。

六世紀までフランスに於いては降誕祭や施洗者ヨハネの祝日にも洗礼式を行っていたが、教会はできるだけ復活日にだけ洗礼式を行うように運動した。

例えば、レオー一世（C.450年）は、他の日に洗礼式を行ふ事を好まず、復活日に洗礼を施すことを奨励した。

これは復活祭の大切な事を教示するためであった。

併し、聖霊降臨日には行われていた。（Pellicia P.10）

その理由は多分、キリスト教が次第に欧州以外に広まり、北部に於いて復活日に洗礼を施すことは非常に寒かった為、聖霊降臨日に洗礼を施す習慣が許可された。（この時代の洗礼は全身を水に浸していた。）

テルトリアンのDe Baptismaの230年頃の洗礼式がこの事をよく示している。

即ち、洗礼志願者は長い洗礼準備の後、聖週間の中に特別の準備をなし、聖木曜日に司祭より Exorcism（悪鬼を放出すること）を受けた。

そして聖金曜日に断食を守り、主教より特別訓戒と Exorcism を受け、聖土曜日に洗礼を施され、堅信礼を受けた。

この習慣は東方教会に於いて守られた。

これはシリルが 348 年エルサレムにてなした Catecheical Lectures の中に証拠が見出される。

4. 洗礼式以外の特別礼拝式

上述の如く復活日の前三日間の礼拝式には洗礼と関係のある多くの礼拝式がある。

また、洗礼式以外に他の礼拝式ができるに至った。

例えば、Etheria (Silvia, C.385 年) という女性エルサレムに巡礼し後述の聖週間の儀式を記録している。

この書は 1887 年に発見された。

” Peregrinatio Etheriae ” という書で彼女の巡礼記である。

彼女がパレスティナの聖地を巡礼してその地の聖週及び復活日の礼拝を見て記録したエルサレム及びベツレヘムの日記である。

彼女の記録によればベタニヤの町に於いて棕櫚の日曜日の前夜より記念礼拝が行われ、日曜日にはオリブ山より棕櫚の枝を持ち、エルサレムへ行列した。その道中、「主の御名によりて来る者は幸なり」と歌った。

そして聖週中、毎日、イエスの受難物語の” 十字架の道行 ” の如く場所から場所へ巡礼をなして聖木曜日の晩、ゲッセマネの園にて通夜を行った。

次の聖金曜日に信者は皆、ゴルゴタの丘に参集し、鞭打の柱を訪れ、ヘレナ女王に見出された十字架 Relic を参拝して熱心に接吻を行ったと言われている。

大斎中に行われるイエスの受難物語の十字架の道行の習慣は前記の棕櫚の行列に端を発し、場所から場所へイエスの御跡を偲んだことに習い、教会内に於いてイエスの受難の聖画を訪れ、イエスの苦しみを偲ぶようになった。

なお、この書には毎日の礼拝につき数多くの興味ある証拠がある。

聖週中の礼拝には修道者達に限らず一般の信者も熱心に参詣し、詩編及び適当な日課が使用された。

斯くして 400 年までエルサレムに於いて此等の礼拝が行われていたが、漸次、この礼拝は東方西方の両教会にも聖週中の礼拝として概ね用いられるに至った。



聖木曜日・ウォッチ (2019 年)

日本聖公会 ナザレ修女会

第三章 東方教会に於ける聖週間（4～10世紀）

1. 序 文

コンスタンチン帝の頃よりロマ帝国に於いては東方教会と西方教会とに分裂する萌を生じていた。

これは当然の事であった。

即ち東方はギリシャ語を使い、西方はラテン語を使用する国民であった。

そのことで自然に両者はかかる関係から一致できなかった。

今一つの理由は、西方は神学的の議論を好まなかったし、東方はギリシャ哲学の影響から神学的議論を盛んにしたところから自然に意見があわなかった。

コンスタンチン帝はこの論争を制禦するためにニケヤ会議を召集したが西方からの出席は主教達僅か七名であった。

西方の人々は政治に於いても論争に興味が無かったが、教会に於いても同じであった。

故に東西両教会の習慣に於いても相違の有ったことは当然であった。

西方教会に於いてはその中心はロマであったのに対し、東方教会では沢山の中心を持っていた。

エルサレムは衰微していたが、アレキサンドリヤ及びアンテオケは依然として隆盛であった。

しかし、新たなコンスタンチノーブルの為にその勢力を削がれるに至り、この頃より更に東方の分裂は甚だしかった。

キリストに関する神学の問題に於いても種々異説を生じるに至った為に教会に於ける礼拝等の習慣も種々様々であった。

しかし何処に於いても復活は第一の祭として守ることに於いては一致していた。

そしてその期節には特別に洗礼式を行っていた。

2. 洗礼式

この洗礼式の習慣は、シリルがエルサレムに於いてなした”Catecheical Lectures”より出たもので400年頃からの習

慣であり、実に長い間続けられている。

1054年、東方と西方が分裂を生ずるまで、洗礼式の習慣は余り変化はなかった。

東方教会はこんな問題に対しては遙かに西方教会よりも保守的であった。（現異邦日（顕現日）－顕現後第一主日・主イエス洗礼の日－は、イエスの洗礼の祭であった故に、この日によく洗礼を施した。）

例えば東方教会にて古くより用いた全身を水に浸す習慣 Immersion（三回水に入れる）は、今日迄も行われている。

また、堅信礼も洗礼式と同時に行われ、決して分離しなかったことも同様である。

このため、子供の洗礼が盛んに行われるようになり、主教が少数にて手不足の為に司祭は主教に代わり堅信礼を施す習慣ができた。

即ち、司祭は大主教 Patriarch の聖別した聖油をもって堅信礼を施した。また、第一回の拝領（初陪餐）も前者と同時にいき、子供（嬰兒）の場合には司祭は指を聖血に浸し、これを吸わせた。

西方教会も長い間、この習慣を守り、洗礼と堅信礼を同時に行った。

例えば、クランマーはエリザベス女王が生まれたとき、三日目に洗礼を施し、また同時に堅信礼を施した事が事実として記録されている。（Procter & Frere P.569 note）

アレキサンドリヤ地方に於いては聖体拝領後、牛乳と蜂蜜を飲ませる習慣があった。（エジプト及びエチオピアの教会は現在までこの習慣を守っている。）

またこの時代は、洗礼後の8日間は、洗礼の白衣即ち Chrisom を着用する習慣を守っていた。（西方では次第に失くなった。）

今日まで、正教会に於いては受洗後8日にして司祭は洗礼の時に信者の額に塗った聖油を洗う。（これは復活の一週間を聖なるものとして守った印である。）

洗礼式は必ず聖土曜日の一つの式として厳守される。

従って、その日の礼拝は洗礼の話で満たされている。

十世紀以後は東方教会に於いてはこの洗礼式に変化はない。

3. その他の儀式

(1) 棕櫚の日曜日

棕櫚の日曜日の特別礼拝は、エルサレムより始まり、東方教会は西方教会よりも先に行った。

この特別礼拝は、その前夜、即ち土曜日の夜より行われた。

そして、棕櫚の行列のために種々の歌が用いられた。特に「主の御名によって来る者は幸なり」

”Benedictus qui venit”を歌った。

この日の聖なる福音書は、マタイ 21 章を用い、棕櫚の枝を聖別して翌日の日曜日にその枝を持って行列、種々の讃美聖歌が用いられた。

その日の特祷は、その棕櫚の行列を記念する文であった。

そして聖なる福音書は、ラザロの甦りの物語(ヨハネ 12 章)であった。

また、拝領(陪餐)時の聖歌は「主の御名によりて来る者は幸なり」を用い、ミサの間に受苦物語を朗読する習慣はなかった。

(2) 聖月・火・水曜日

教会の初めの時代には、これ等の日にはミサは行われなかった。

殊に、東方教会に於いてはこの習慣をよく守った。この三日間は、「ミサのない日」alitururgical day として守られた。

併し、洗礼志願者の訓練は行われていた。

なお、拝領(陪餐)が許されたようであるが、聖体は既に以前聖別され保存されていたものを拝領(陪餐)させた。

これは Pre-sanctified mass と言う。(聖別したパンを保存する時、僅(わずか)かの聖血をパンに浸して保存した。)

(3) 聖木曜日

東方教会に於いては、この日は昔よりミサが行われ

ていた。

この日は主イエスがミサを制定されたことよりも主イエスの苦難を記念する式であった。

また、この式文は聖クリソストムの式文ではなく、この式文より遙かに古く、併も簡単な聖パジルの式文であった。

聖なる福音書は、四福音書よりの受苦物語であり、使徒書は聖体記念の記事で、聖公会の使徒書と同じ。

(コリント前書 11:17-34)

○ 油の聖別式

主教のいる教会に於いてこのミサの終わりに油の聖別式が行われた。

油は堅信礼に用いる聖油である。

○ 洗足式

足を洗う式は、この夜、大聖堂と修道院に於いて行われた。

また、コンスタンチノーブルに於いては、王は宮廷にて十二人の貧者の足を洗った。

この式は七世紀より行われた。

(4) 聖金曜日

この日の礼拝は、長時間を要した。

例えば、早祷には十二箇所福音書が朗読された。

これは特別にみな四福音書より採った受苦物語(受難物語)であり、他の祈祷時間 Hours も非常に長かった。

晩祷 Vespers に於いては祭壇の敷物は主イエスの死体の巻物と認め、聖堂の真中の棺の上に乗せ復活日のミサまでそのままに保存し、墓詣りの意味で信者はこれを参拝した。

この日は全く alitururgical day であるため Pre-sanctified mass も行われなかった。

即ち、主イエスはこの日ゴルゴタの丘の上に犠牲を捧げられた故にミサの犠牲は捧げない。

また、他の一の目的は断食を破らないため拝領（陪餐）を遠慮した。（併し、十一世紀より聖母の蒙告日一聖母マリヤへのみ告げのデーがこの日に当たれば、この祭を守りミサが行われた。）

（５）聖土曜日

初めこの日は aliturgical day であった。

この日は主イエスが墓に居られることを記念し、聖堂に於いて前日より安置された棺の前にて式を行った。

早祷の間、主イエスの遺骸を拝し、晩祷後は十世紀よりヴィジルの式を行った。

この時はすでに復活日に近づいており復活の歓喜と混ざっている。

福音書はマタイ 28 章（復活の話）である。

即ち西方に於いては夜のミサが次第に早くなり、土曜日の午後に行われ、その結果、夜のミサは失くなってしまった。

東方に於いては、その夜のミサは厳粛に守りながら、別に午後のために、このミサが行われ、此処に復活の歓喜が入ってきたのである。

（６）復活日

聖土曜日の夜に入り Vigil 礼拝が始まり、この式に使徒言行録の全部を読んだ。

これは十世紀頃より始まり、洗礼志願者教育の名残りである。

深夜になり、即ち夜の 12 時に至り、主イエスが復活された意味にて棺の覆物を取り除き聖所の中に移す。

そこで行列が始まり、教会の外部に出て、婦人や弟子達が御墓を訪問した例に因み、聖堂内に進んで、この時、教会の鐘を鳴らし、沢山の蠟燭に点火して復活の歓喜が始まった。

先ず早祷が始まり、信者は互いに主の復活の挨拶をした。

この習慣は今日までも守られ、概ねミサの後に行われる。

そして家に帰り、司祭の祝福した食物を食した。

○ 復活の鶏卵 Easter eggs

初代教会に於いては、東西両教会とも毎日のミサに、信者は食物を持参し、祝福を受けた。

そして帰宅してこれを食する習慣であった。

この習慣は東西ともに次第に廃されたが、復活日だけには残されていた。

西方教会に於いては、復活のミサの後、鶏卵を特別に祝福し、家庭に持ち帰り食した。

これは卵が孵化して雛鳥になることを主イエスの甦りに例えたものが今日でもこの習慣は守られ、教会学校等に於いては殊更に喜ばれるものである。

次にクリソストムの一つ”Catecheical Lectures”の教えを朗読した。

これは洗礼志願者教育の名残りである。

次に Hours の祈りを全部朗読しクリソストムの礼拝を行った。

使徒書は、使徒言行録 1:1-12

福音書は、ヨハネ伝 1:1-19

なお、福音書は多くの国語で朗読された。

殊に十字架の捨て札の国語、ヘブル語、ギリシャ語、ラテン語にて福音書が朗読された。

第四章 西方教会の聖週間 (4～10世紀)

1. 序 文

ローマの街の教会は、西欧州における西方教会の中心であったことは確かである。

後年に於ける問題、即ち、聖ペテロ、教皇、及び帝国主義等の問題は別としてローマは西方の母教会であった。

一教区に於いてはその中の統べての教会は中心教会即ち主教座のある教会に自然に従った。

従って西欧州の西方教会はローマの街の教会の習慣を受け入れた事は明らかである。

東方帝国の人々の性質は西方の人々の性質とは前述の如く自然相容れなかったために、ローマ帝国は二区分されるに余儀なくされた。

その形式は教会内に実現され、ギリシャ語を使用する教会はギリシャ語教育のため哲学的、理論的の思想的問題を好み、一方ラテン語を常用する教会は余り議論的なことは好まなかった。

併し、ラテン語文学やまた帝国政治学の影響で教会の問題は自然政治問題に立ち至った。

ローマの保守的性質につき述べれば、東方の世界が感情的、劇的に儀式を愛好する性質に反し、ラテン世界は実質的であって東方の感情的、劇的な儀式を望まなかった。

故に、ラテン世界の中心であるローマ教会の礼拝儀式は飾りなき厳粛な礼拝で、また教会は使徒時代よりの長き歴史を継承するために変化を求めなかった。

スペイン及びフランスに信者が拡がるにつれて、この厳粛なる儀式の習慣を守る事が困難を来し、東方より侵入し来る儀式の習慣や、また一方彼等自ら感情的礼拝を生じた。

後年に至りその風習は徐々にローマの街に侵入することになった、が併しローマは保守主義のためその侵入発展は甚だ困難を極めた。

例えば、ニケヤ信経が Liturgy に採用された歴史を見るに五世紀に於いてアンテオケに始まって、次第にアレキサンドリア及びコンスタンチノーブルに拡大されていった。

ジャスチアン Justinianus 帝は、自国の統べての教会にこ

の信経使用を発令した。

西方に於いては、トレド第三会議(589年)に於いて、スペインがカトリック主義に転化し、これを堅固に履行するために、毎主日の式文にニケヤ信経を用いることにした。

その後、次第にフランス、ドイツ及び英国の教会にその習慣が移入されるに至った。

ローマの街の教会に於いては、十一世紀迄このニケヤ信経をミサ式に使用しなかったが 1014 年皇帝ヘンリー 2 世はベネディクト 8 世教皇に命じこのニケヤ信経をミサ式文に挿入するに至った。

ローマ教会はこの時代まで、約 400 年の間、保守主義のためニケヤ信経を採用しなかったと同時に、他の礼拝式文も同様な状態に置かれていた。

故にローマ教会の聖週間の礼拝はカール大帝〔原文「シャーマン帝」：(742 年 4 月 2 日 - 814 年 1 月 28 日)は、フランク王国の国王(在位：768 年 - 814 年)。西ローマ皇帝(在位：800 年 - 814 年)。初代神聖ローマ皇帝とも見なされる。カロリング朝を開いたピピン 3 世(小ピピン)の子。フランス語でシャルルマーニュ(Charlemagne)、英語読み：チャールズ大帝〕の時代迄、エルサレムに於いて Etheria が記述したるが如き聖週の特別礼拝は用いられず、ただ洗礼式と洗礼志願者の準備くらいに過ぎなかった。

2. 洗礼式

Duchesne の説明によれば、この時代の洗礼は大斎の間に洗礼志願者の準備を行った。

特に、聖週中に特別準備をなしたという。

七世紀に至り、大斎第二主日より準備の試験 Scrutinies を始めた。(これは儀式的試験の意味で儀式の中に試験が行われた。)

また、洗礼志願者は各々 Scrutinies に於いて魔除 Exorcism を受けた。(魔除を行う人は補祭より下位の人であった。)

第三の試験に於いて洗礼志願者は福音書と信経及び主祷を教えられた。

この式は「耳を開け」という特別名称があった。

これ等の Scrutinies は聖週中に終わり、第七の Scrutinies

は洗礼式の直前に行われた。

この日は即ち聖土曜日であった。

聖土曜日はミサはなく、洗礼志願者は昼の間に司祭より最後の Exorcism を受け、Effeta を受けた。(Effeta は”開け”の意味。マルコ 7:34)

即ち、司祭は信者の知識が自由に開け、よき信仰の戦いをなし得るよう洗礼志願者の口と耳に聖油を塗った。

次に、洗礼志願者は胸と背に油の注ぎを受けた。

此処に至り罪と悪魔の業を捨てる約束を宣言 (Renunciations) し、使徒信經の暗誦が初めて許可された。

この式が終わり、晩に洗礼式が行われ、式中に最後の教訓が施された。

それはゲラシウスのサクラメンタリーの書にある旧約聖書の十二の教訓である。

これを十二預言書と言う。

1. 創世記 1 : 1 - 3 1 及び 2 : 1 - 2
2. 同 5, 6, 7, 8 の中より
3. 同 22 : 1 - 19
4. 出埃及記 14 : 24 - 31 及び 15 : 1
5. イザヤ書 54 : 17 及び 55 : 1 - 11
6. バルク書 (アポクリファ) 3 : 9 - 38
7. エゼキエル書 37 : 1 - 14
8. イザヤ書 4 : 1 - 6
9. 出埃及記 12 : 1 - 12
10. ヨナ書 3 : 1 - 10
11. 申命記 31 : 22 - 30
12. ダニエル書 3 : 1 - 24

洗礼志願者はこの教訓を受けた後、主教はラトラン大聖堂の洗礼堂に向かい、その道中、嘆願を誦(となえ)つつ入堂した。

そして先ず洗礼盤の水を聖別し、信仰の質問三つを提出して、その後、洗礼を施した。

このラトラン大聖堂の洗礼盤は今日まで存在している。

非常に広い洗礼盤で40～50人がその中に立つことができる。

大勢の人々が受洗する時は、主教の他に司祭、補祭もそ

の洗礼盤内に入り洗礼を施した。

洗礼が終わると、主教は聖十字架の小聖堂に入り聖油 Chrism を以て新しき信者が額に十字架の記号を印した。

次に、新しき信者は新調の白衣 Chrisom を着服し堅信礼を受けた。

洗礼者が多数の場合は組み組みに分ち、主教は聖霊の祈禱をなし、各信者の額に聖油を以て十字架の印をした。

この聖霊の祈禱は現在我々の教会で使用する堅信礼の祈禱である。(日本聖公会祈禱書 * 1939 年祈禱書 413 頁 七霊の祈) ⇒ 1990 年祈禱書 293 頁 主教は立ち、... 手を延べて言う。

この堅信礼を終わって主教は大聖堂に入り復活の第一ミサを献げ新しき信者達はこのミサに於いて第一の拝領(初陪餐)を行った。

このミサの終了は概ね暁になった。

ミサの終了後、新しき信者達は聖別された蜂蜜および牛乳を与えられた。

これは約束された国に入る意味を現すものであった。(出埃及記)

この習慣はアレキサンドリアの風習を採り入れたものであるが、恐らくグレゴリー一世により廃止させられるに至った。

併し東方教会は現在迄もこの習慣が続けられている。

次に復活の Octave は長い祭で、その間、新しき信者達は毎日ミサに出席した。

そして洗礼時に用いた白衣を着服して毎日洗礼堂及び聖十字架の小聖堂まで行列を行った。

3. その他の儀式

(1) 棕櫚の日曜日

ロマに於いてはこの棕櫚の日曜日の特別礼拝は仲々容易に行われなかった。

metz の Amalarius はこの特別礼拝の習慣のある教会に用いられたのは9世紀に成ってからだと言う。

また、スペインの Isidore は特にこの日を棕櫚の日と云い、ホザナの聖歌を用いたり、また棕櫚の枝を使

用したことを語っている。

また Alcuin はこの棕櫚の行列は何処にもあったと記している。

彼は英国人でカール大帝のチャブレンであった。この時代には、英国やフランスに於いてこの礼拝が行われていたようであるから、多分十世紀までにローマに侵入していたと思われる。

併しカール大帝の時代まではローマに於いてこの棕櫚の行列は行われなかったことは確かのようにあるが、その後、時を経ずしてこの風習が始まった。この時代に於ける棕櫚の行列の形式は、ミサの前半であった。

即ち、特禱、使徒書、福音書の後にユーカリステック Eucharistic の特別な棕櫚の聖別禱があった。

ある学者の説によると、先に棕櫚のミサを施行して他の教会まで行列を行い、その教会でその日のミサを献げたと、この後者のミサは先に行ったミサの残りである。

式の形式は初代教会の祈禱式の型であった。

例えば、Vigil の礼拝は聖書朗読の間に詩編を唱えた。

併し、この式はミサの残りの式ではないと主張する学者もある。

(2) 聖月・火・水曜日

4 世紀よりローマに於いては、これらの日には教会に集まることに定められた。

即ち Station day であった。

主教は（この時代に教皇制はできていなかった）、ある教会に集まり、行列して定められた教会 Station church に行き、その教会でミサを献げた。

ローマに於いては初代より聖火曜日にマルコ伝、聖水曜日にルカ伝の受苦物語をミサの中で朗読し、聖週中に四受苦物語を読んだ。

即ち、棕櫚の日曜日にマタイ伝、聖金曜日にヨハネ伝の受苦物語を読んだ。

Mozarabic Liturgy や Ambrosian Liturgy には、マタイ伝

の受苦物語は聖木曜日にだけ朗読されて、現在に至っている。

Gallican Liturgy に於いてはマタイ伝受苦物語は棕櫚の日曜日に朗読された。

次第に西方の教会はローマの風習に従って行ったがミラノでは、今日まで元の習慣を守り、聖木曜日にマタイ伝受苦物語を朗読する。

聖水曜日の晩は、初代の頃より聖木曜のミサを待ち、晩と朝の礼拝を夜の間に言う習慣があった。

この習慣は 800 年まで守られた。

そして礼拝は日没 Vigil に始まり、夜の祈り、即ち Nocturns , Lauds の中には聖書の長い朗読を行い、また沢山の詩編をその間に唱えた。

また寂寥(せきりょう)たる句、即ちエレミヤの哀歌の如きものを朗読した。

これは主イエスの苦難を指すものであった。

この式に於いては聖堂内の蠟燭を次々に消し、最後の一燭を残し、これを祭壇の背後に隠してその礼拝を終了した。

これは主イエスの死を象徴したもので、なお暁に至る頃、その光を再び祭壇上に持ち出し、主イエスの復活の象徴としてその日のミサを始めた。

この式は聖木曜日及び聖金曜日にも行われるようになった。

中世期に至りこの式は Tenebrac と称し、その前夜に終了するようになった。

(3) 聖木曜日

聖木曜日は、主イエスがユーカリスト Eucharist を建て給うた日としてこれを記念した。

397 年聖アウガスチンの時代には、この日に二つのミサが行われた。

一は昼に入浴を欲する人々のため早く執り行われ、一は主イエスの晩餐を記念するために断食を守った人々のために晩に行われた。

また、6 世紀になり、ローマでは三つのミサが行われ

た。

1. 懺悔痛悔をなして赦罪を与えられた人々のため
2. 油の聖別のため
3. 最後の晩餐を記念するため

○ 洗足式

福音書の記事によれば、主イエスは聖木曜日の晩に弟子達の足を洗い、食事を与え給うた。

(ヨハネ 13:4 - 15)

この福音書の記事により自然に洗足の儀式が生まれた。

694 年トレド会議に於いて主教達は主イエスの模範に従い貧者の足を洗う規則を作った。

併し、十一世紀まではこの洗足の儀式はロマに採り入れられなかった。

その後採り入れられ、教皇は 13 人の補祭の足を洗い、また夕食後に 13 人の貧者の足を洗った。

以上 13 人の足を洗う事につき次の説がある。

即ち、グレゴリー 1 世が洗足の式を行ったとき、13 人であったが、その中の一人は主イエスであった事が発見され、それ以来、13 の数が用いられるようになった。

この挿話が事実とすればグレゴリー 1 世時代即ち 600 年頃に既に洗足の式はロマに於いて行われていたことになる。

(4) 聖金曜日

聖金曜日は、西方教会も東方教会と同じく何処に於いてもミサは行われなかった。

八世紀頃、ロマに於いて十字架の崇敬が行われ、また Pre-sanctified mass が行われる。

十字架の崇敬式はエルサレムより採り入れた儀式であったがこの式の型は不明である。

エルサレムに於いては真実の十字架が崇拝され、信者は交互にその十字架の木に接吻を行った。

ロマに於いて、後年に於けるこの儀式には十字架崇

敬の讃歌を唱えている。

○ Pre-sanctified mass

前述の如く、この式はただ Canon (sarsum corda と聖別祈) のないミサである。

即ちすでに聖別されて聖櫃 tabernacle に保存されていた聖体を拝領 (陪餐) することである。

東方教会に於いては大斎の間、土曜日及び日曜日の他は聖別祈は余りに感謝的であるとの理由で使用されなかった。

それで保存聖体を拝領 (陪餐) するに至った。

ロマ教会に於いては聖金曜日と聖土曜日に限り、聖別祈を遠慮した。

この日を特に Aliturgical days と言う。

ロマ教会に於いてはこの儀式は甚だ簡単な式であった。

奉献の間に既に聖別されて保存されていた御聖体を祭壇上に置き Canon の終わりの主祈を用い、ぶどう酒と混合し、この混合により普通のぶどう酒は聖別されたものと認め、此処に兩種拝領 (陪餐) をした。ロマ教会に於いては十三世紀迄は兩種拝領 (陪餐) を行っていた。

(5) 聖土曜日

聖土曜日は、前述の如く、ミサのない日であった。

そしてこの日、洗礼式とまたその他に新しき火と蠟燭の聖別式が特別に行われた。

東方教会に於いてはエルサレムに於いてのみ新しき火の聖別式が行われ、今日もなおその式は継続されて行われ、頗る盛大な儀式である。

西方教会に於いてはこの新しい火の聖別式は相当に古くより行われ各教会に広まっていた。

併し、当時ロマの主教達はこの新しい火の聖別式を地方教会に許可していたが、自分の教会では行うことを許可しなかった。が併し、550 年頃になり、ロ

マ教会にもこの特別式を行う許可を与えることになった。

この儀式に於いて新しい火を聖別し、次に蠟燭の祝福祈を行った。

この祝福祈は、主教、司祭の任務ではなく大補祭（大執事）により行われた。

グラシウスのサクラメンタリーの中に一の型があるが、この時代に於いては何処の場所の教会に於いても自教会の型があった。

併し、現在のロマの missal の型は一般の標準と認めることができる。

この蠟燭の祝福祈を大補祭が行ったことは一の異例であるが、当時教会内の燈火の務めは司祭ではなく補祭の領分であった。

実際から云えば大補祭の行う祝福祈は祝福文ではない、補祭は祝福ができないためである。

併し、ロマの missal に於いては現在これを祝福祈と称し、大補祭がこの式を行う。

この祈りの型に於いては補祭は信者の祈りの助力を求め、次にユーカリスティクの長い祈祈を行う。

○ Eucharistic Form

教会の祈りに Collect Form と Eucharistic Form の二つの型がある。

後者は感謝の言で満たされた祈祈文である。日本聖公会に於いてはこの感謝の言はミサのなかだけに用いるが、この言は洗礼式の水の聖別や聖職按手式、聖堂聖別式、Solemn Prayer 等にも使われる。

A 蠟燭の祝別式

ローソクの特別礼拝式を記述すれば次のようである。

特別の大ローソク（Pascal Candle）を復活の光の象徴として福音書を朗読する場所に置く、この場所は福音書の Ambo と云われる。

先ず福音書を詠唱する音符を以て司式者は信者の祈りを求める。

この祈りの型は各地方に於いて相違していたが司式者は何処の地方に於いても補祭であった。

なお、一般的儀式は次のようであった。

補祭は先ず天使の助力を乞い、主によりて作られた統べての物の同和を求め—全世界即ち全公会の祈りに合致するように全信徒の祈りを求めた。

この祈りは甚だ詩的であった。

この祈りに続き、厳肅の祈りが初まり、互いの挨拶が行われて神羊唱 Sursum Corda を唱えた。

それは日本聖公会の特別感謝 Proper Preface のようなものであった。

これは主イエスの十字架の贖いのために特別感謝をなし、このローソクの上に神の祝福の降らんことを祈るためであった。

十字架の贖いに就いてはロマの式文に種々の興味ある例がある。

即ち主イエスの贖いを引き起こさせた罪を O felix culpa! と言う。

天主教の出版になる『聖週間典礼』には、「嗚呼、幸福なる過失よ」と記されている。

この言は一見すると甚だ残酷な言である。

斯くの如き用語を用いることは甚だ破廉恥なことであるが、これを記した人には理由があった。

即ち、これは神学問題ではなく、単に歌詩であって、主イエスの十字架の贖いの重大さを表現するためで、主イエスは御自身の贖いによって父なる神の愛をその処に示されたのである。

その十字架の贖いを敢えて惹起せしめた人類の罪は煎じ詰めれば我々人類の喜びの原因であり、また甚だ幸いなことであつたと言うことである。

このローソクを以て、昔、神がイスラエル人を導き往きし火の柱に例えた。

その火の柱はイスラエルの過越の祝いを輝かしたる如くに、キリスト教の過越祭を輝かせ、また火の柱

が昔イスラエル人の砂漠の旅路を導き行きし如く、キリストの光が新しき信者をこの世の中に導くように例えた。

尚また、聖母マリヤが眞に貞女であり、輝ける光をこの世に示した如くに蜂の蠟より作られたこのローソクが美しい光を放つように、新しい信者がキリストの光によって世の中に美しい光を放つように等の祈りである。

この祈りを終わり、大ローソクに点火する。

此処に至って次のように言う。この光のために暗黒の聖堂が照り輝く如く、我々も洗礼により暗黒の世界から光の世界に入ることができるようにと。

次に他のローソクに点火すると聖堂内は全く明るく照らされる。

この時、一の光より点火され、多くの光に分かたれたが元の光の威力は少しも減ずる事もなく全く元の間までであると唱える。

これは主イエスの御力、御恵みが如何に多くの人々に分かたれるとも、この光の如くに少しもその力は減ぜず、ますます偉大さを示すことを言うのである。

B 香の聖別

ローソクの祝別式の中に、ローソクに香を嵌め込む習慣があった。

633 年トレド会議に於いて決定されたもので、主イエスの傷跡を記念するために大ローソクに傷をつけ、五粒の香を十字型に嵌め込む習慣である。

実は、この習慣は言の解釈上からの誤りより来たる結果であったと思われる。即ち Incensi という語がそれである。

ある時代にこの語を「香」と解釈した。

併し、実際の意味は光を点火する意味であったと思われる。

この夜の Incensi と書かれていたためにルカ伝 1:10 を引照して光の供え物と共に香の供え物をする習慣になったようである。(Fortescue; Holy week 33p)

このローソクの儀式は Vigil Service の前に行われたものである。

実は、この歓喜しき礼拝は洗礼の準備や洗礼式の後に行われるべき儀式であった。

現在でも少々変則な型に見える。

この式のために補祭は白の祭服を着用してローソクの聖別を行い、次の預言書朗読のためには、また紫の祭服を着用する。

併しこのローソクの儀式を先に行った理由は、夜の礼拝のために光が必要であったためであろう。

故にこの式は洗礼式の前に行われたと思われる。

このローソクの祝別式もロマ教会に於いては仲々用いられなかった。

恐らく棕櫚の特別礼拝と同様にシャーリマン帝（約 800 年）の時に行われるようになったと思われる。

(6) 結 論

十世紀に進み、西方教会に於いては、聖週間の特別礼拝はほとんど行われようになった。

その中に於いてロマの街の教会は上述の如く常に他に遅れて諸式を採り入れていた。

ロマの街以外の一般ガリカンの Liturgy には聖週間の特別礼拝は割合に早く採り入れられていたが、十世紀迄は西方教会の全体に行われていなかった。

棕櫚の日曜日に於いては棕櫚の行列が行われた。

また、ロマの Liturgy に従う教会に於いてはこの日のミサに於いて聖マタイ伝の受苦物語を朗読した。

聖火曜日、聖水曜日にも受苦物語を読み、尚、聖金曜日にはヨハネ伝の受苦物語を朗読した。

西方教会の統べての大聖堂と修道院に於いては、聖木曜日、聖金曜日、聖土曜日の前夜に Vigil の礼拝が行われた。

聖木曜日の元のミサは十世紀までに廃止されて、儀式的に聖体記念のミサだけが残された。

大聖堂に於ける聖木曜日のこのミサの中で主教は油の聖別をした。

また十世紀迄は聖金曜日には、何処の教会に於いても十字架崇敬式が行われた。

なお、この日、ミサが行われなくても Pre-sanctified mass が行われた。

併し十一世紀よりこのミサに於いては司式者だけが拝領することになった。

この時代になり、大人の洗礼の殆ど無くなり、洗礼式と関連のある礼拝、即ち聖土曜日の礼拝は概ね簡略になった。

併し、必ず洗礼盤の聖別を行い、その前に Vigil service の十二の預言書を朗読する習慣を守った。

また、何処の教会に於いても火とローソクの祝別式を行った。

この時代迄、その夜のミサは時間を繰り上げて早く（多分、午後4時頃）行い、復活日のためのミサは別に一つのミサを行った。

十二世紀にはこの夜のミサを午後に繰り上げ晩祷をこれに加えた。

併し、ある修道院に於いては中世紀までこのミサを日没まで行わなかった。

そして昔の習慣に従って、このミサに於いて拝領した。（中世紀からロマのミサに於いては司祭のみ拝領した。）

このミサに於いて大栄光の頌が唱え始められと同時に教会の大鐘は打ち鳴らされた。（この鐘は聖木曜日の午後から主イエスの死を悲しみて鳴らすことを止めていた。）

この習慣は九世紀より行われた。

この大栄光の頌の時に鐘を鳴らすことは特に主イエスの復活を歓喜を以て迎え奉り、主の甦りを宣告として鳴らされたのである。

なお、小グロリア（父と子と聖霊に栄光あれ云々）も鐘と同様にこの期間遠慮された。

第五章 ガリカンの聖週間

1. 序 文

一般に子教会はその母教会の習慣に従うことは当然であるが、また各々の特別の習慣ができることもある。

実はロマ地方に於いても東方教会と関係のあった教会もあった。

例えばミラノは西ローマ帝国の都としてコンスタンチノーブルと連結をしていたために東方教会の習慣が多分に採り入れられていた。

また、南フランスに於いては昔より小アジアと関係を持っていた。

スペインに於いてはある時代にアリウス主義が相当に勢力を張っていた。

アウグスチンの時代の前、英国の教会と小アジアの習慣が相当にあった。

例えば、復活日の習慣がそうであった。

中世紀に於いてロマは次第に帝国主義に発展し、自分達の習慣に従うよう他教会に運動を起こした。

併し、この運動は仲々に困難であった。

トレント会議及びピウス五世のミサ改正の時代迄は各地に於いて主教の式文制定権 Jus Liturgicum を自由に任せていたが、その後は非常に厳格になった。

併し、過去 200 年間の風習を実証できる式文は許可された。

その影響でミラノ大教区やトレド大教区およびある修道院の特別式文は許可された。

聖週間に於ける諸儀式に対し、西欧州の諸教会で行われた特別儀式の研究は興味がある。

この Gallican Type の研究をするには我々聖公会の直接関係深いセーラム Sarum の式文は最も効果がある。

2. 洗 礼

十一世紀に至り、西方に於いては殆どキリスト教になったために、大人の洗礼は余り行われなかった。

嬰兒を出産すると一日も早く受洗するようになったので、聖週間の特別洗礼式の行事は廃れることになった。

ただし聖土曜日の儀式の中に洗礼盤の水の聖別は固く守られて、この水は一年間、洗礼のために使用された。

また、ある場所の教会に於いてはできる限り聖土曜日に子供の洗礼を行うように注意していた。

西方教会に於いては、司祭は堅信礼を任されなかったために、子供の堅信礼は洗礼と切り離し、自然延期の止むなきに至った。

十世紀には洗礼後一カ年以内に堅信礼を受けなければならぬ規則はあったが、英国に於いては 13 世紀のある会議に受洗後三カ年の間に堅信礼を受ける規則ができた。

また十五世紀となり、子供は七歳までの中に堅信礼を受くべきであるとされた。

十六世紀になり、トレント会議に於いて十二歳迄の延期が許可されることになった。

併し、ロマ教会に於いては時折東方教会の習慣に従い、主教の任命した司祭は主教の聖別した聖油をもって堅信礼をおこなった。

そして、今日までもなおロマ教会に於いては以上の司祭の堅信礼を許可している。

礼式と堅信礼が別々に行われるようになった事はプロテスタントの新しい教えのためであった。

現在では子供が成長し、自分の意志によって洗礼時の意志を堅める式となった。

改革時代迄にはキリスト教の現在の考えは全然無かった。

教会の最初からの考えは、現在東方教会に保たれている通り、堅信礼は洗礼の主要部分であった。

西方教会に於いては聖土曜日の晩に洗礼盤の聖別を行うが、その前に前夜の Vigil Service を行う。

この時に洗礼志願者の教訓が朗読された。

これは預言書の朗読が各地方により各種の習慣がある。

例えば、四預言書が読まれ、また六預言書、八預言書、十二預言書、十四預言書と一致しなかった。

例えば、セーラムに於いては次の四預言書が朗読された。

1. 創世記 1:1 ~ 2:2

2. 出埃及記 14:24 ~ 15:11

3. イザヤ書 4:1 ~ 3

4. 申命記 31:22 ~ 30

ミラノに於いては六預言書、ロマに於いては十二預言書を朗読した。

各預言書朗読の間に特祷と詩編が朗読された。

次に嘆願を唱え、洗礼盤に行き水の聖別を行った。

セーラムに於いてはこの式は非常に長い儀式であった。

先ず水中の悪鬼を追い出すために十字架の印をなし、次にパラダイスから四方に水が流れ出た意味で、水を四方に振り撒いた。

次に水の上に呼気を出し、聖霊の恩恵を入れる意味で復活のローソクより十字架の形に蠟を垂らして、更に復活のローソクをもって十字の形に水を切り、その上に聖油を垂らして聖別した。

そしてこの水をもって洗礼を行った。

更にまた嘆願を唱えた。

この嘆願は普通の嘆願と違う歌の嘆願であった。

次に司祭は祭壇に上りミサを開始したのである。

このミサに於ける特祷は「この晩」と言うが、十一世紀になって源の晩のミサが昼に行われるようになった。

西方教会に於いては、何処の地方の教会に於いても、このような昔からの復活祭の特別洗礼式の名残を守っていた。

そして改革時代迄、地方的に各自の習慣を守った。

例えば、ミラノは中世紀の洗礼盤の特別の聖別式を守った。

その式は現在のロマ教会の式よりも遙かに簡単なもので、その式の前の嘆願はなく、洗礼を終わって、祭壇に帰るときにセーラム式のような嘆願的な歌を歌った。

3. その他の儀式

(1) 棕櫚の日曜日

西方教会に於いては、棕櫚の特別式は各々様々に執り行はれた。

例えば、ミラノに於いては簡単に行われ、今日までその式文を守っている。

司祭は一の祈禱を以て棕櫚の枝を祝福し、直ちに信者に配布するがその間に詩編 119 : 1 ~ 8 を唱える。

次に他の聖歌を歌いつつ行列を行い、教会堂を廻り、再び堂内に入り祭壇に上り "Benedictus qui venit" を歌う。

複雑な儀式的例としては、英国に於いて複雑に執り行われた。

アルクインは、この棕櫚の行列に聖書を尊重する余り、これをキリストの御体として担いだと云われている。

この様な式は英国に於いて 800 年から流行となっていた。

セーラムに於いては中世紀の英国の風習として特別に儀式を盛んにした。

使徒書、福音書はあったが、ロマ教会のようにそれほど "Missa Catechumenorum" の形ではなかった。

先ず出埃及記 15 : 27 ~ 16 : 10 を朗読し、次にヨハネ伝 12 : 12 ~ 19 を朗読、引き続いて五の特禱をもって棕櫚の枝を祝福し、幾つかの聖歌を歌った。

次に、聖別された棕櫚を信者に配布し、保存聖体を行列に加えて堂外に行列を進めた。

斯くの如く行列に聖体を参加させることは十一世紀、英国に於いて初まり、後にフランスで行われるようになった。

次に堂外に出た行列は、第一の場所に停止し、補祭はマタイ伝 21 : 1 ~ 9 を朗読、更に行列を進めて第二の場所に停止して聖歌 89 番 (「ユダのわらべの」) を歌った。

そして他の聖歌を歌いつつ再び入堂した。

○ 聖歌 89 番 (1922 年改訂増補版「ユダのわらべの」)

この聖歌の歴史は、次の如く伝えられている。

Orleans の主教 Theodulph (828 年) はチャールス大帝の息子ルイスに反対し投獄された。

その獄中にある時、棕櫚の行列の通過するのを聞き、自作の棕櫚の讃歌を大音声で以て歌った。

帝はこの讃歌を聴き感激すること甚だしく、遂に彼を放逸したと、これが 89 番である。

この盛大な入堂行列は前述の如く、主イエスがエルサレ

ムへ入城した記念で特別の歓喜の意味で聖堂に入るとき、花や枝及び聖別なしのパンと一緒に混ぜて散布して祝った。

聖歌を歌いつつ入堂するが聖所の入口の十字架の前に於いて一旦停止し、歓喜の意味にて十字架の覆い物を取り除き、次に祭壇上の覆い物を除いて十字架を押し床に接吻、司祭は祭壇に昇り、その日の特禱を唱えた。

また、ある地方に於いてはこの儀式以上にドラマ的な行事を行った。

例えば、独逸に於いては司祭は木の驢馬に乗り行列を行った。

また、英国のあるところでは予言者の格好をしてメシアに対しての預言を朗読した。

以上の様に各様の習慣が行われたがヘンリー八世は棕櫚の特別儀式は廃止しないように勅令を出した。

そしてエドワード六世の終わりまでは概ねこの儀式を守っていた。

エリザベス女王の時代には、この日には枝をもって教会を飾った。

英国の祈禱書から棕櫚の日曜日の名称が削除された時、なお、諸地方にその名称は守り伝えられ、またある地方に於いては教会に関係のない行列が行われたりした。

(18 - 19 世紀)

(2) 聖月・火・水曜日

アウガスチンの努力によって、英国の Liturgy は七世紀より漸次にロマ教会と同じようになった。

即ち、ロマ教会の Missal の棕櫚の日曜日の式文の様に、マタイ伝の受苦物語を用いた。

また同様に他の三日も各々ロマ教会の Missal のものに習った。

聖月曜日の福音書は、ヨハネ伝 12 : 1 ~ 36、聖火曜日はマルコ伝の受苦物語、聖水曜日はルカ伝の受苦物語を朗読するようになった。

この受苦物語の読み方には、特別の方法が行われ、三人の補祭は福音書を読む台の上に昇り、特別音符を以て長い

物語を朗読した。

一人はテナーで福音記事を読み、一人はバスで主イエスの箇所を読み、他の一人はアルトで人々の箇所を朗読した。

そして主イエスの十字架につけられ呼吸絶え給うと読み終わって、三人一緒に祭壇に向かい主祷をとなえ、再び会衆に向かって朗読を続けた。

受苦物語の最後の文、即ち主イエスを墓に葬り、番兵をつけ云々はその日の聖なる福音書として朗読された。

○ Tenebrae

聖水曜日、聖木曜日、及び聖金曜日の晩に Tenebrae を歌った。

この Tenebrae の意味は暗い陰鬱と言うことであるが、夜に行うという意味である。

クランマーの説明によれば、主イエスがユダヤ人の前に公然と出なかったことを記念する為であると言われている。

実は、この礼拝に於いてはこれ等の晩の

Nocturns, Matins, Lauds を一緒に唱えた。

現在に於いても修道院に於いてこの三つの礼拝を晩に行う。

○ Breviary

セーラムの Breviary には 24 本のローソクが必要とされ、祭壇の右に三角の位置に立てたが、一般には一定されなかった。

この様なローソクの台は地方によっては大変立派な物で、1562 年スペインの Siville に作った真鍮の燭台は 25 尺 (750 cm) もあった。

この礼拝に於いては 12 人が 12 の預言書と 12 の福音書を朗読し、読みながらローソクの光を一つずつ消した。

併し、最後の一本は消火しないで祭壇の後方に隠し、全く暗黒の聖堂となって詩 51 編を唱えた。

地方的に各種の解釈があるが、例えば最後に残した一本の光は主イエスに譬え、主イエスが御墓に葬られた

ことを記念するためと言い、またこの光を聖母に譬え、聖母マリアが最後まで十字架の許に一人残ったことを示すと言う。

次に詩編を用い、隠した最後の光を再び祭壇の上に置く、これは前述の如くに主イエスの甦りを意味する。また、ローソクを祭壇の上に出揃え大音を出すべしとの注意がルブリックにある。

これは弟子達が主イエスの復活に狼狽したこと、また主イエスの死に際して起こった大地震等を象徴するものであると言う。

Seville に於いては現在も軍人が銃を用い大音響を出す。

また地方に於いてはこの習慣は徒ら事(いたづらごと)の原因となった。

最初のこの音はローソクを祭壇上に出す合図のために過ぎなかった。

(3) 聖木曜日

中世紀までには、痛悔者の為のミサは失くなくなっていたが、その修練を受けた者が教会に受け入れられる儀式は 14 世紀までであった。

例えばセーラムのミサに於いて None の後、司祭は正門の前に行き懺悔者を迎え、詩 34 編を用いて教会の内部に同行して更に祭壇の前に至り種々の祈祷をした。

主教または司祭が赦罪の宣告をして後にミサが開始された。

主教のミサであれば大栄光の頌を唱え、使徒書は現在の使徒書、福音書はヨハネ伝 13:1~15 を使用した。

これは主イエスが弟子達の足を洗う物語でヨハネ伝 13:14 の主の命令の語から Maundy Thursday 命令木曜日の名ができた。

この日のミサに於いては三つの大きなパン (ホースト) を聖別した。

一つは翌日のミサのため、一つは墓に葬る為であった。

このミサの拝領 (陪餐) が終わると主に晩祷を行った。

大聖堂に於いては主教は聖別祷の終わりに油の聖別を行

い、三種の油が聖別された。

一つは病者のため、即ち抹油式用、一つは洗礼志願者のため、他の一つは Chrism と呼ぶ洗礼、堅信礼、祭壇等の聖別に用い、また戴冠式の際に王に塗る聖油である。

ミサ及び晩禱が終わり、日没になって Maundy と云い、Compline のために集合した。

その Compline の前に祭壇の幕を取り除いて聖句を歌いながら祭壇の洗浄を行った。

次に小聖堂に行き、洗足の儀式を行った。

この儀式に於いて補祭は当日の福音書を朗読し説教をした。

この中で最高職位にある二人は他の聖職の足を洗い、最後にこの二人はお互いに足を洗い合った。

この洗足の行われている間は詩 67 編、51 編または 119 編を唱えた。

この洗足式が終わると愛の杯を互いに廻し飲み、一特禱をもってこの儀式を終了した。

Compline は只一人で行った。

以上の儀式はセーラムに於いては今日もあるが、他の地方に於いては違った行事が行われた。

第四章に於いてロマ教会に於ける習慣を記した。

英国に於いては帝王は 12 人の貧者の洗足を行った。

欧州に於いては概ね前記の如き洗足式が行われた。

そして主教達はその地方の貧者の洗足を行った。

この習慣は前述の如く 694 年トレド会議の決議であった。

ウエストミンスターに於いては修道院長は 12 人の乞食の洗足を行ったと Bede の語るところに拠るとヨークの大主教と Oswald は一年中毎日 12 人の貧者の洗足を行い、なお彼らに食事を与えた。

(4) 聖金曜日

セーラムの Missal には、None の後、司祭は祭壇に昇り、聖歌を用いず pure-sanctified mass を始めた。

使徒書代用は出埃及記 12:1~12 を用い、次にヨハネ伝の受苦物語を朗読した。

この朗読の中に「我が衣を闇 (ノ) にせり」の如く、祭壇より二つの敷物を取った。

また、「呼気を絶え給ふ」の記事の場所で祭壇に向かい跪き、その後は前述と同じであった。

受苦物語の後に Solemn prayer を読んだが全公会のための 18 の特禱が用いられた。

これは古くからこの時に全公会のための祈りがあったためであろうからその時代の名残と思われる。

ロマ教会の Missal にもこのような祈りがあるがその数は僅か (わずか) 九つの祈りである。(これらの祈禱から日本聖公会のこの日の三特禱ができた)

なお、この長い祈りの後、聖金曜日の特別儀式が行われた。

即ち聖十字架の崇敬式である。

○ 十字架の崇敬式

セーラムの式に於いては司祭と司式者は祭壇の側に腰掛け、一人の司祭は跣足 (裸足) にて覆いをかけた十字架を持ち、祭壇の後ろより歌を歌った。

この歌はインプロペリアと云われ、マラキ書 3: 13, 14 のような字句である。

英語ではリプローチ reproach (注: とがめの交唱 聖金曜日の典礼中に歌われる) と言う。

司祭の歌の答えとしてギリシャ語の Trisagion (注: 聖三祝文 (せいさんしゅくぶん)、「聖三の歌 (せいさんのうた)」とも呼ばれる。) を唱えた。

即ち、 $\text{Α γ ι ο ς Ὁ Θεός, Α γ ι ο ς ἱ σ χ υ ρ ό ς,}$
 $\text{Α γ ι ο ς ἄ θ ἄ ν α τ ο ς, ἐ λ ἑ η σ ο ν ἡ μ ᾶ ς.}$
聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、

万軍の主、その光榮は全地に満つ。

これは東方教会からギリシャ語のまま、ガリカンのラテン語式文に採り入れられたものである。

東方教会のミサでは司祭は行列が聖所の門に入るときこれを歌った。

ガリカンのある地方に於いては、ミサの「キリエ エレイソン」の前にこれを歌う習慣があった。

また、福音書の前または後に歌われたこともあった。
これ等の習慣からこれをロマ教会の式文に入れるようになった。(Pullan; B.C.P The Book Common Prayer)

次に司祭達は十字架の覆いを取り除き、「十字架の木を見よ、いざ拝め」と歌った。

次に詩 67 編を唱え、聖職は交互に祭壇の前に置かれた十字架を拝した。

この間中、十字架の讃歌を歌った。

そしてこの十字架を聖堂の真中に安置して拝聴者達が皆、十字架を拝し終えて再び十字架は祭壇の上に置かれた。

次にセーラムに於いては、保存聖体を祭壇上に運び、Canon の終わりの主祷を唱えて拝領（陪餐）が行われた。

次に引き続き Vespers をとなえ、更に祭壇上の十字架を取り保存聖体と一緒に御墓に行列をなしその処に葬った。

この御墓を特に Easter Sepulchre と言う。

この当時、Easter Sepulchre は教会の壁の中に扉式に作られ、英国、フランスに於いて沢山発見れる。

実は、十字架だけをその墓に入れた。

十三世紀になって、聖体は聖木曜日からその墓に保存されるようになった。

この十字架の墓に聖体を保存する習慣は英国に始まり、復活日の朝まで保存された。

この式はロマ人の葬式のように行われていたので改革の時に批判の的となった。

聖体の保存としたために、墓の前に沢山の光を用いる習慣があり、信者は交互に参詣祈祷を捧げ復活の朝まで通夜を行った。（「ウォッチ」）

15 ～ 16 世紀になり、ロマ教会の習慣が変わり、十字架の葬りを廃止するに至った。

そして聖体の保存を主とし、聖金曜日の Pre-sanctified mass まで通夜が行われることになった。

即ち聖木曜日の朝から聖金曜日の朝まで通夜が行われた。

この聖体保存の場所を Sepulchre と云い現在でも用いられている。

(5) 聖土曜日

この時代になって前述の如く、大人の洗礼は無くなり、洗礼の儀式の価値は次第に薄れてきた。

そして他の儀式が隆盛になってきた。

その第一のものはエルサレムの習慣より採り入れた火の祝別式であった。

火の祭、太陽の祭は何処に於いても行われていたので、この火の祭をキリスト教的儀式に採り入れた。

633 年トレド第 4 会議に於いて聖土曜日に大ローソクを祝別する事にした。

英国にては聖週の木曜、金曜、土曜日の毎晩この祝別式が行われた。

フランスに於いては十六世紀迄、この儀式を行う習慣があった。

併し、一般のガリカンの習慣では聖土曜日のこの式だけが大切にされて守る事になった。

この式は当時、午後に行われたと 1150 年頃の Giraldus は言う。

併し、時間は次第に繰り上げられ午前中に行うところもあるようになった。

セーラムのこの式の習慣を述べると教会内の続べての火を消し、新しい火を作った。

この新火の作り方は、レンズを使って太陽から作ったり、また石と鉄、石と石を用いて火を作った。

できた新火をローソクに取り、これを槍に付け暗い堂内に入堂した。

この時、司祭は教会の正門外または玄関に、なおまた大聖堂にてこの式が行われる場合は、堂内の内部に少し進んだ処で火の祝別を行った。

また、これと同時に香の祝別を行った。

そして香を焚き、光の聖歌を歌いながら教会の中を行列した。

司祭が祭壇に達すると既に述べたよう補祭は福音書を読

む場所に於いて復活の大ローソクを祝別した。

この時、大ローソクを祝別する文 Exultet は歌われ、西方教会と同じ、この大ローソクは復活週間中、早祷、ミサ、晩祷に、また主日及び祭日のミサに点火され、昇天日まで用いられた。

スペインの Seville に於いては 40 日の間点火し続けた。ダラムの大ローソクは高さは天井に達し、天井より点火した。

セーラムの大聖堂は 36 尺（約 10 m）のものを使った。

なお、1457 年カンタベリーの大聖堂の大ローソクは 2000 ポンド（約 900 k g）の重量があったと云われる。

これ等のローソクの大きさについては、当時の会計簿より調べができたと言う。

このローソクの祝別式に続き、預言書の朗読が行われ、セーラムに於いては四つの預言書が用いられた。

セーラムに於いては、洗礼盤に向かう途中は嘆願を唱えた。

その聖別は西方教会の型と同じであった。

十二世紀になり、この晩の復活ミサは（深夜 12 時）昼に行われるようになった。

このミサに於いては古い型が守られ準備の祈り、また信経は用いず、聖別後の神羊唱及び感謝の特祷も用いなかった。

大栄光の頌が流行するようになってこの日のミサに使用するようになった。

この大栄光の頌が歌い始められると同時に前述の如く大きな鐘を鳴らし、大祭壇の前に掛けられた覆物（これは大斎の始めより掛けた物）を取り除いた。

この習慣は今日までシシリヤに守られている。

このミサが午後に行われるようになってから、式後に晩祷を添加するようになった。

（6） 復 活 日

セーラムに於いては、他の地方に復活のミサをその前日に行う習慣になっても古い習慣を守った。

この日のミサの始まる前に聖職は十字架と一緒に葬った

聖体を秘かに祭壇に移し、行列をして Sepulchre まで行き、復活の聖歌を歌いながら十字架を墓から出し、祭壇に帰った。

この時、大斎中に掛けた覆物を全部取り去った。

第一祈祷書にクランマーはこの式の聖句と特祷を用い早祷前にする式を作った。

この日のミサは、古い夜のミサが聖土曜日に繰り上げられたために、西方教会に於いては復活日のために特にまた作られた。

なお、復活の一週間は毎日特別ミサがある。

第六章 英国の聖週間礼拝の改正 — 改革時代

1. 序 文

英国に於いてはヘンリー八世時代には、聖週間の特別礼拝に余り変化はなかった。

1536年ヘンリー八世の *Kings Book* に十字架崇敬及び *Sepulchre* の習慣などは讃美すべきものとして長く維持すべしと記されている。

その説明にはこれ等の儀式には罪の赦し等の権威はなく、我々の心をして神を仰がしめ、神より罪の赦しを与えられるものであると。

大陸に於いてプロテスタント運動が隆盛になるにつれ、ヘンリー八世の終わり頃になって特別礼拝の廃止運動が起こった。

1547年エドワード六世の時、プロテスタント主義の影響を受けた

人々は、次第に勢力を得、1548年1月政府は、棕櫚の日曜日の儀式の廃止、2月に聖金曜日の十字架の崇敬の廃止の令を出すに至った。

2. 1549年の祈祷書

克蘭マーは、この時代に現在よりも簡単な礼拝式を作るため、聖週間の礼拝を簡略にした。

併し、聖週を公会暦の他の部と比較してその重要性を承認している。

第一祈祷書に棕櫚の日曜日の特別式文は用いなかったが、ミサ式の中にセーラムと同じくマタイ伝26、27章の受苦物語を朗読した。

聖火曜日には、この日の受苦物語を区分し、一章を聖月曜日に、他の一章を聖火曜日に朗読した。

聖水曜日にはルカ伝の受苦物語の一章を、他の一章を聖木曜日に朗読した。

このように受苦物語を区分して朗読した結果として、聖木曜日のセーラムの福音書の洗足の記事は失われた。

併し、聖体記念のミサとしてセーラムの使徒書（コリント前11章）を守っている。

これ等の結果、この日の油の聖別式及び洗足式は示され

ていない。

なお、注意すべきことは、この祈祷書は一般信者のために作られたものである。

ある主教は、油の使用を廃止したが、他の主教は油の使用を守り続けた。

そして英国教会に於いては戴冠式のために油を聖別する行事を今日も失っている。

教会は洗足の儀式を廃止したが、帝王はこの儀式を守り、エリザベス一世女王は自分の年齢と同数の貧者の足を洗った。

また、ジェームズ二世は、この洗足式を行った最後の人であった。

併し、その後も帝王の代理者がこの洗足の務めを続けた。

現在、英国に於いては、この日にカンタベリー大主教は王の代理者としてこの儀式を行い、貧者に王の金を配布すると、司式者は古い儀式の残りとして手拭いを帯の間に挟む習慣があった。

また、*Breviary* 即ち早祷、晩祷を簡略にしたために聖週間の夜の *Tenebrae* はできなくなった。

併し、聖水曜日の晩祷より聖木曜日の早、晩祷及び聖金曜日の晩祷には *Tenebrae* の中で読んだエレミヤの哀歌を読むようになった。

聖金曜日の儀式は著しい変化はなかった。

克蘭マーの目的は、ミサ式全部を使用する考えであったと思われる。

即ち、この日 *Pre-sacred mass* を廃して、ミサを行う考えであったようである。

前述のセーラムに於けるこの日のミサと同じく、ヨハネ伝の受苦物語を全部朗読し、他の式を廃止した。

ただし、18の *Solemn prayer* の中より2特祷を取り、この日のために作り、更に、早祷のための特祷と王のための特祷を加えた。

そのために十字架の崇敬式を失くし、また *Pre-sacred mass* の拝領（陪餐）も失くなって、初めて教会の歴史に新しくこの日にミサを捧げる習慣が始まった。

祈祷書を簡略に改正したことは一方から見ると良い目的

であったと思われるが、そのために東西両教会の古い習慣を失い、またこれに反対するに至ったことは残念である。

克蘭マーはミサ全部を行う命令はしなかったので、昔の習慣を認めたはずであった。

併し、後の時代になり昔の習慣を破ることになった。

(Procter & Frere)

また、聖土曜日の儀式の変化は甚だしかった。

中世紀に於いて昼間に行うようになった復活のミサを廃止した。

勿論これには理由があった。

セーラムに於いては復活日の朝、主イエスの復活の意味で十字架を Sepulchre より取り出してミサを開始した。

これが自然に復活の真のミサになってしまった。

故に、聖土曜日のミサは時間的に不適當であった。

斯くの如く時間的に複雑化したために克蘭マーは聖土曜日の復活ミサを全然廃止してしまった。

この復活のミサは教会に於いて昔より保守されてきていた最古のミサであった。

また更に、火の祝別式は廃止され、ローソクの祝別式および香の祝別式と共に廃止されるに至った。

また洗礼の特別礼拝も廃止された。

この昔の洗礼式は、復活とペンテコステに於いてのみ行われたもので、第一祈祷書の洗礼のルブリックにはできるだけこの習慣に従うようにと克蘭マーは記している。

水の聖別は、毎月一度行うように聖別式を作った。

また、この日に洗礼の行われたことを記念するために特別ミサ式文を作った。

即ち使徒書はペテロ前3章、洗礼の話、福音書はマタイ伝 27:54-E、イエスを墓に葬る話、故にこの日が Aliturgical day であってもミサを捧げるようになった。

復活日も克蘭マーはセーラム式文を簡単に作り直した。

この式の聖句ロマ書 6:9-10 を取り、コリント前 15:20-22 を加え、一特祷を追加した。

これは特別式として早祷の前に行われた。

英国に於いてはこの早祷は当時、晩に行っていた。

早祷中に別の日課を定め、早祷後二つの式文を作った。

第一のミサは早祷の後、第二のミサは九時頃に行われた。

なお、第一ミサに於いてはセーラムの復活日の特祷を用い、使徒書は復活前日の使徒書、福音書はヨハネ伝 20 章即ち復活の話であった。

第二のミサに於いては特別の特祷を作った。(日本聖公会祈祷書 1938 年、復活後第一主日の特祷)、使徒書、福音書はセーラムのを用いた。

この二つのミサは甚だ興味を増す。

即ち、昔は深夜に一つのミサが行われ、東方教会は現在までこの習慣を守る。

西方教会はこのミサが次第に早く行われるようになり、前日聖土曜日にまで早く行うことになり、復活日のために他の一つのミサがができた。

克蘭マーは第一祈祷書に更にその上に一つのミサを加えたことになる。

克蘭マーは復活日のため特別感謝 Proper Preface を守ったが、他の聖週日には用いなかった。

なお、復活週間の特別ミサの中、月曜日、火曜日のミサのみを守り、他の日は祈祷書に採り入れなかった。

実は信者が余り出席しなかったために自然にこのような守り方にした。

3. 1552年の祈祷書

第二祈祷書を作った時代は、プロテスタント主義が勢力をもっていたが、この改正に於いて聖週間の式文に変化はなかった。

棕櫚の日曜日のミサにマタイ伝の受苦物語の全部を朗読し、聖金曜日にヨハネ伝の受苦物語の全部を朗読した。

復活日の早祷の前の特別式は廃止となり、早祷中の招待の詩 95 編の代わりに、第一祈祷書にある二つの句を使用した。

また第二ミサを廃した。

なおこの祈祷書に於いては復活の Proper Preface は復活の Octave 中のみ使用することになった。

4. メアリー女王の5年間(1553~1558年)

第二祈祷書の生命は甚だ短命であった。

即ちメアリーが女王に即位すると同時にセーラムのミサ式文を再び採用した。

そして聖週間の行事は復活と棕櫚の行列はまた盛んに行われた。

またその他の儀式も同じく行われるようになった。

プロテスタント主義者達は甚だしく反対を称えたが、一般の人々は支持愛好した。

この時代の教会の会計簿を見ると聖週間の特別礼拝のための諸道具類、例えば復活のローソク台、Tencbraeの燭台及びその他の諸道具が購入されている。

5. エリザベス女王時代

メアリー女王没後、ロマ主義のカンタベリー大主教 Pole も相次いで死去した。

メアリー女王に迫害されたプロテスタント主義者は増々勢力を得ていった。

エリザベス女王はプロテスタント主義者ではなかったが教皇主義に反対であった。

女王の戴冠式のミサは、メアリー女王時代に用いたセーラムの式文であった。

エリザベス女王及び聖公会主義者達は第一祈祷書を英国教会の祈祷書にする意見であったが、プロテスタント主義者たちはこれに反対してエドワード六世の第二祈祷書を用いる運動を起こし、此処に大論争が展開された。

遂に第二祈祷書が採用されることになり、これを基礎に改訂を施し、祈祷書を作製することになった。

この改正に於いても聖週間の部には触れることもしなかった。

(転写者註：第一祈祷書(1549)は、内容的にはセーラム典礼(英国ソー ルズベリーで用いられていた中世の典型的な典礼様式)を元にした。第二祈祷書(1552)は、徹底した形での改革神学への傾斜が見られる。)

6. 1661年の祈祷書(第五祈祷書)

クロムエル(Cromwell ピューリタン革命の指導者：王制を廃し、共和制を施いた)は、1655年に聖公会祈祷書の使用を拒絶した。

そのために五年間、聖公会の式は行われなかった。

1660年チャールズ2世は、英国に迎えられて王に即位し(王政復古)、聖公会は再び自由になった。

当時、聖公会主義とプロテスタント主義が両立した。

チャールズ一世時代より残っていた熱心な聖公会主義者達は、プロテスタント主義者達に、教会の中に於いて満足を与えるため、最大の努力をもって自分達の主義主張を犠牲にして、1661年遂に祈祷書を改正するに至った。

しかしなお、不幸にもプロテスタント主義者達の主張と融和できず、遂に相談の結果、エリザベス祈祷書(第三祈祷書(1559)：「第二祈祷書の保守的改定版」)以上に聖公会主義に戻すことになった。

この改正に於いて聖週間の式文に甚だ不賢明な取り扱いをした。

即ち、棕櫚の日曜日の受苦物語の前半を早禱の第二日課に朗読し、聖金曜日のヨハネ伝の受苦物語の前半を早禱の第二日課に朗読することにした。

また聖土曜日の特別特禱を作った。

これは復活日の特別な句、即ちコリント前 5:7 と栄光の頌を詩編の形に作ったものである。

第七章 オックスフォード運動と聖週間礼拝

1. 18世紀に於ける英国の宗教

1661年の改正祈祷書は、プロテスタント主義者に満足を与えなかった。

この当時、多くの分派が生まれた。

若し宗教家が政治に立ち入ることが許されたならば聖公会はより良き宗教を作ることができたかもしれない。

ジェームズ二世は、ロマ教会に転じて追放され、1689年にカルビン主義者ウィリアムが英国王に即位した。

熱心な聖公会主義者達はこの新帝に服従の誓約ができず、この人々 Non-Jurors は、教会を去ることを余儀なくされた。

新帝の任命した主教達はプロテスタント主義の人々で Latitudinarian であった。(これは教会の役員というよりも政府の役人に近く、宗教の熱は薄く、教会は眠っていた。)

次の世紀になり、ジョン・ウェスレーのような熱心な聖公会主義者が出たが、聖公会の中に留まる場所はなかった。

また 1717 年ジョージ一世は教会議会と争論し、その後 100 年間、その会議を開催しなかった。

それは教会側にとっては甚だ不利益なことであった。

斯くして 18 世紀は聖公会にとり甚だ不愉快な時代であった。

この時代、聖公会に於いては、司祭は規則として必要な礼拝を行い、日曜日のみ教会を開いて早祷式を行った。

ミサは一ヶ月一回または三ヶ月に一回行われたに過ぎなかった。

聖週間の特別礼拝に至っては考慮されなかった。

反対に大陸のロマ教会に於いては特にイエスウィット (Jesuit イエズ会士) の努力により宗教的復興があった。

この人は聖週中の特別礼拝を再興する努力をし、聖金曜日の三時間礼拝を行うことにした。

一方、聖公会は沈黙時代であったので宗教的思慮のある人々は概ねウェスレー派に加入した。

併しこの世紀の終わりに至って、聖公会の復興が始まり Evangelical 主義ができた。

この主義者の中には宗教生活の改善運動や社会事業及び

奴隷解放運動を起こし、また日曜学校開設や更に海外伝道の応援に力を尽くす者もあったが、礼拝に関しては余り気分を傾けなかった。

2. 十九世紀の英国の宗教

上記の十八世紀に於ける Evangelical 主義運動と共に文学に於いてロマンティック復興が興った。

十八世紀の物質主義に嫌気がきて中世紀の善さを顧みて、より美術的神秘的であり、また宗教的である方面に意を注ぐことになった。

この空気に於いてオックスフォード運動が勃発するに至った。

この運動の主意は次のようである。

即ち、教会は歴史を有することに主眼を置き、キャソリック Catholic 主義の習慣を考慮して、この当時に於ける政府の宗教感よりも主イエスより受け継がれた権利主張の方が権威があるから昔より受け継がれた歴史を承認すべきであると主張することであった。

この運動の結果、昔より伝えられた公会暦の価値を認めて再び公会暦を厳粛に守り、祭日及び断食を厳重に守るようになった。

そのため公会暦は教会の勤行を守るために必要欠くべからざるものと認められるようになった。

最初の運動家 Pusey、Keble、Newman 等は祈祷書の公会暦を厳重に守った。

故に、聖週間の式文を正しく守り、説教を加え、その記念する意味をよく教えた。

その運動の結果、英国聖公会は再び聖週間と復活の儀式、礼拝を覚え、Low church 派に於いてもこれを守るようになった。

1860 年頃に大陸よりロマ教会の三時間礼拝 (黙想会) が侵入、これを守るようになったが Low church 派もこれに従った。

この運動の結果、教会の歴史的礼拝を研究する人々は、聖週間の特別礼拝をクランマーが廃止したことを甚だ残念に思った。

例えば、棕櫚の日曜日の特別礼拝は廃止されて教会に於いては記念されなかったが Palm Sunday の名称はよく用いられた。

また、ある地方に於いては行列の残りがあり、またロンドンに於いては、棕櫚の日曜日の前日に棕櫚の枝を路傍で売っていたことが明らかにされている。

1861 年、英国の古今聖歌集ができた時、ロマ教会の Missal の行列の句を Neale 博士は聖歌に作り直した。

これが日本聖公会聖歌集の 89 番である。

オックスフォード運動によりその当時よりこの方、棕櫚の日曜日にはこの 89 番を歌って行列をすることになった。

また、ある教会に於いては中世紀時代のように棕櫚の枝を分配するようにもなった。

この棕櫚の儀式と同様に他の特別礼拝の使用も希望されるようになった。

第八章 結 論

東西両教会に於いて初代教会より復活を中心とする前後の一週間に大切な礼拝が行われた。

復活の祭は、公会暦の中心行事であって、聖公会もこの復活の諸行事を習慣として守った。

東西両教会とも大人の洗礼が次第に減じて復活の最大行事であった特別洗礼式はその重大さを失くした。

併し、クランマーの聖土曜日の式文を伺い、洗礼式のルブリックを見ると洗礼式の重大さを等閑(=いいかげん、なおざり)にできなかったようであるが、時代の転移と共に復活の洗礼式は次第に軽視されるようになった。

正教会やロマ教会が共にこの行事を忠実に守ることに對して、聖公会がこの重大なる儀式を等閑したことは甚だ残念である。

幸いに日本聖公会に於いてはこの復活の洗礼式を行う事を努力するようになった。

なお、すでに述べたように、復活日に洗礼を施すことは教会歴史にその重大性を明示しているが、この行事を再び活かして守る事は公会のために願わしいことである。

オックスフォード運動の結果、この洗礼式を次第に重要視するようになったが、この洗礼式の儀式は特に厳粛に行われるべきである。

我々信者は、救いを得るためにキリスト自ら建てられたこの聖典をよりよく心に納めなければならぬ。

聖公会のある地方、例えば南アフリカの聖公会に於いてはガリカンの特別式を再び採用するようになった。

即ち、洗礼式の時、新しい信者に白衣を着せ、新しき生命と新しき光を意味する点火ローソクを与える。

この行事は復活の祭と共に殊更に意味の深いことである。

東西両教会共に洗礼式以外に種々の特別儀式ができて、儀式は複雑化した。

西方教会に於いてある儀式は次第に無役化した。

十五世紀のある儀式、例えば十字架の崇敬式は迷信的となった。

ロマ教会に於いては聖土曜日の復活のミサは、その朝に

行われ、その後、大齋の断食を破るので公会暦の障碍となった。

それで今日、ロマ教会で守られる習慣は西方教会の標準と認めることは困難である。

現在のロマ教会の儀式は、1572年からのもので、その改正はロマ教会にとり好結果であった。

即ち、俗的に流れたガリカンの習慣を廃して割合に簡単にしかも正当な式文を作った。

例えば、棕櫚の日曜日に於いてはガリカンの俗的な習慣、即ち英国にて行われたお祭り騒動的儀式や棕櫚の行列中に聖体を擔(か)ぐこと等の俗事を排除して適当に厳肅な儀式の型に戻したことである。

故に聖公会主義者はそれ等の儀式を再び採用するために努力すべきである。

英国に於いては改革者達はこれ等の礼拝を廃止する適当な理由を持っていただろうが現在に於いてはその儀式を敬遠する必要はあるまい。

ある時代の聖公会式文の改正は完全であったと承認することはできない。

即ち、1561年の改正に於いては棕櫚の日曜日の受苦物語を二区分して一章を早禱式に、他の一章をミサに用いたことなど、適当な処置ではなくて、この受苦物語は二章連結して、始めて完全な物語となるのである。

一章ごとに区分して朗読するときには、その間に大切な意味が一時的に中断される。

これを拝聴する信者は主イエスの受難の苦難を覚えることに於いて気分を減ぜられる。

また、同じ時代に於いて聖金曜日の受苦物語も同様に区分せられた。

前章に述べた如く、克蘭マーはこの悪習慣を行い、聖火曜日の受苦物語を二区分してその前半を聖月曜日に、後半を聖火曜日に朗読した。

また、聖水曜日のルカ伝の受苦物語を二区分して前半を聖水曜日に、後半を聖木曜日に用いた。

このルカ伝の受苦物語を聖木曜日に廻したことは最も甚だしき誤りであった。

このために、聖木曜日の洗足の物語は削除されて了った。この原因で聖木曜日の礼拝に悪影響を及ぼした。

聖木曜日のミサは主イエスの聖体記念の祭を守ることが当然であるのに、受苦物語が用いられたために悲しみの空気を改正する気分が濃厚になった。

1929年の米国聖公会の改正に於いては、中世紀の聖なる福音書ヨハネ伝 13:1 ~ 13 を受苦物語の代わりに用いることを許可した。

1928年の英国聖公会の改正に於いても、棕櫚の日曜日のこの日の受苦物語を全部朗読し、ロマ教会の如くマタイ伝 27:62 ~ 66 を聖なる福音書とした。

また、聖金曜日に於いても同様な許可が与えられた。

なお、聖金曜日の礼拝儀式も中世紀の特別礼拝は失はれて淋しくなった。

併し、オックスフォード運動の結果、この日を重要視するようになって、各国の聖公会に於いて三時間礼拝が行われるようになった。

これは勿論望ましいことであるが、聖公会が歴史的儀式礼拝を捨ててこの様な新しい礼拝を採用入れることは少々変則である。

聖公会信者は三時間の有益な説教を聴くことよりも、昔よりその日に行われてきた厳かな儀式を守り、それに適宜に加えられる祈祷及びこの日に関する説教があればより聖公会的ではあるまいか。

東方教会に於ける棺詣りの風習や、ガリカンに於ける十字架の墓詣りの風習を再び採用する希望はなくてもこの聖金曜日を十字架の記念日として適当な特別礼拝を守るべきである。

我々の用いる古今聖歌集には、十字架を讃美する聖歌がある。

これを見ても聖公会に十字架崇敬の行事が許可されないことはあるまい。

以上のような主義に立つ聖公会に於いては、即ち、聖体を保存する教会にあっては前日の聖木曜日に聖別されて保存された聖体の拝領(陪餐)式がある。

また、この日、ミサ式文の全部を行って一般信者の拝領

(陪餐)を許す教会もある。

併し、この聖金曜日は昔から聖体の聖別は行われない日であるから、東西両教会の習慣を破ることは甚だ遺憾である。

復活日に信者は皆、拝領(陪餐)に与るべきであるから聖金曜日に聖体を拝領(陪餐)しないことはそれほどの苦痛ではあるまい。

東西両教会に於いては、信者達はその必要を認めなかった(Liturgy & Worship)。

聖土曜日は、新郎の不在のために拝領(陪餐)の遠慮は適当と考えられていた。

現在の聖公会に於いては、この日は全く無関心である。東方教会は、理想的に云えば、最も適切な習慣を守っていると云える。

即ち、前章に述べたように、夜の礼拝は初代教会より受け継がれた行事である。

西方教会に於いては中世紀にこの夜の礼拝を聖土曜日の昼にまで引き縮めて了った。

併し、クランマーはこの式は不適當であるとして廃止した。

この式の廃止は、歴史を尊重する人々にとっては甚だ遺憾至極であった。

また、西方教会に於いて厳肅優美なローソクの祝別式は失われ、またこの夜の洗礼式も失われたことは大きな損失である。

故に、聖公会に於いては、その日の礼拝儀式を再興する運動が勃興して、ある教会に於いては、この夜に、火及びローソクの祝別式や洗礼を行い、また復活日のミサまでミサを延ばすことに努力している。

また、ある教会に於いては、現在の西方教会の習慣に従ってこの日の洗礼式を昼に行い、その夜に復活の第一のミサを行っている。

Brechin の主教 Mackenzie は、次の暗示を与えて云った。

「火及びローソクの聖別式を行い、また Vigil service の預言書を用いて洗礼式を聖土曜日の夜遅く行って、復活の第一のミサは復活日の真夜中に行うようにするか、または

早朝に延長すべし。」と。(Liturgy & Worship) この様に聖土曜日の礼拝儀式を復興させることができるとするならば、現在の東方正教会の習慣と接近することができる。

また、西方教会に於いての最初の 1200 年間の習慣を再び守る事ができる次第である。

日本聖公会に於いて、既にロマ教会の三時間礼拝を守っている教会は各所にあるが、それは望ましいこととして、更にそれ以上に昔より伝わる古い聖公会の習慣を再び現在の教会に復興させることことは遙かに望ましいことである。

既に聖公会に於いて昔より行われたこれ等上述の聖週中の特別礼拝を復活実行している教会は諸地方に沢山ある。

日本聖公会に最も近接、隣接している朝鮮聖公会(現在の大韓聖公会)に於いても改正祈祷書にこれ等の特別礼拝式が録されている。

例えば、棕櫚の日曜日に中世紀の棕櫚の礼拝式を簡単に訂正して採り入れている。

司祭は早祷の後、紫のコープを着用して侍者等とその祭壇に上り、Benedictus qui venit を唱える。

次に、特祷、使徒書、福音書(エルサレム入城)を用い、更に棕櫚の祝別祷を唱える。

そして聖水と香をもって棕櫚を聖別してこれを信者に配布する。

次に聖歌 89 番を歌って行列を行い、再び祭壇に上って、一の特祷を用いてミサを始める。

このミサの中にマタイ伝の受苦物語を前章に説明した方法を採用して三人が朗読する。

聖月曜日は、中世紀の福音書ヨハネ伝 12:1 ~ 9 を朗読する。

聖火曜日は、マルコ伝の受苦物語を朗読、聖水曜日はルカ伝の受苦物語を用いる。

聖木曜日は、聖体記念のミサとして最も厳肅に行い、福音書は中世紀の洗足の物語を朗読する。

なお、このミサに於いては、翌日即ち聖金曜日の Pre-sanctified mass のために二つのホーストを聖別する。

このミサの終わった後で、行列を行い、聖体を保存する

場所、即ち「墓」と称する場所へ聖体を遷(うつ)して安置する。

信者は次のミサ、即ち聖金曜日の朝まで、交互に御墓に安置された聖体の通夜を行う。「ウォッチ」

大聖堂に於いては、主教はミサを行い、聖別祷の後、油の聖別を行う。

これは既に述べた通り、洗礼志願者、堅信礼、病者、その他のために三種類の油の聖別をする。

聖金曜日ー受苦日には、早祷を行い、後に Pre-sanctified mass を行う。

そしてヨハネ伝の受苦物語が朗読される。

次に全世界の人類のために八つの特祷が唱えられ、十字架の覆物を除いて十字架を讃美する聖歌を歌う。

次に、保存されていた聖体を祭壇に運び遷して、司祭はこの聖体を拝領(陪餐)する。

その後三時間の黙想を行う。

聖土曜日には、早祷を行い、ミサは行われない。

この日正午(12時)になって特別礼拝を行う。

即ち中世紀の火とローソクの聖別式を簡単に行い、更に次の四つの預言書を朗読する。

1. 創世記 1: 1 ~ 2: 2
2. 出埃及記 14: 24 ~ 15: 1
3. イザヤ書 4 章
4. 申命記 31: 22 ~ 30

次に洗礼式を行う。

大聖堂に於いては主教は堅信礼を行う。

その後、嘆願を唱えて後に、復活の第一ミサを行うが、先ず大栄光の頌が歌われ始めると同時に、教会の鐘が打ち鳴らされる。

これも前章に述べた通りで説明は控える。

夕刻になって、復活の第一晩祷が行われる。

昼間に信者の集まることの困難な教会に於いては、この日の特別儀式を全部夜になって行い、その時は復活の第一ミサは削除される。

この後者の方のやり方は前者よりも初代教会の礼拝式に最も近い方法である。

これ等の聖週中の諸儀式に列する人々は、意義深い厳粛な式に深く感動して、主イエスの復活の歓喜を感激をもって迎える。

併し、これ等の厳粛な礼拝式に与る人々は、ただその儀式やその歴史にだけ興味を起こしてはならない。

儀式の中にエルサレムの二階座敷に於ける主イエスの最後の晩餐やオリブ山及びカルバリに於ける主イエスを偲び、更に主イエスの御墓に心の目を開いて凝視すべきである。

聖木曜日の美しいミサや聖体の行列また保存された聖体の墓、更に受苦日の寂寥さ、また復活前日の昔から伝わった諸儀式の中に主イエスの最後の晩餐と主イエスの御困難及び主イエスが御墓に休まれた事実を覚え悟らなければならない。

なおまた、美しいローソクの祝別式や洗礼式の中に主イエスが我々に与えられた新しい光と生命を悟って復活の栄光を受けなければならない。

これをなすことによって信者は常に主キリストの十字架を恥とせず生涯キリストの徒となつて、また忠実なる兵卒となつて、その旗の元にあつて勇ましく罪と世と悪魔とに戦うことができるであろう。

参 照

1. Procter & Frere ; A new History of the Book of Common Prayer
Macmillan,London 1907
2. Feasey ; Ancient English Holy week Ceremonial
Baker,London 1897
3. Liturgy & Worship " Latin Rites & Ceremonies"
K.D.Machengie and other articles S.P.C.K 1933
4. Duchesne; Christian worship (in English) S.P.C.K 1904
[Contains "Peregrinatis Etheriae"]
5. I.F.Hapgood; Service Book of the Holy orthodox-catholic
Apostolic church (in English) Associaed Press、New york
1922
6. H.Hamilton Maughan; The Liturgy of the Eastern orthodox
church Faith Press, London 1916
7. F.E.Warren; The sarum missal (in English)
Mowbray,London 1913
8. Pellicia ; Polity of the Christian church 1877
Traslated by J.C.Bellett J.Masters,London 1887
9. A.Fortescue ;The Holy week Book
Burns & Oates,London 1913
10. First prayer Book of Edward VI Eveyman Edition
11. Second Prayer Book of Edward VI Eveyman Edition
12. S.Cyril ; the Catechetical Lectures Parker,Oxford 1872
13. L.Pullan ; theHistory of the Book of Common Prayer
Loringmans,London 1901
14. 大野敏之著 聖公会の礎 昭和 12 年 (1937)
15. チーグレル訳 聖週間典禮 昭和 8 年 (1933)

註：この書は現在のロマ教会の聖週間の礼拝式文とを
記載したものである。

補 遺 (転写者による)

セーラム、ガリア、モサラベとアンブロシウスの典礼

ガリアとモサラベの典礼は、本質的にその性格は西洋のものであって、ローマの典礼のようなその中の東方の要素は、単にそれらの地方が後に東洋(方)との接触によって得た結果であると考えられている。

セーラムの典礼は、「サリスベリーの聖堂大教会で使用されていたローマの典礼の中世の地方における変容である。1427 年までに、それはイングランド、ウェールズ、アイルランドのほぼ全域で用いられていて、1543 年には、カンタベリーの聖職会議(Convocation)が全地域にセーラム聖務日課を課した。」その聖歌のいくつかは、今日、アングリカン教会で歌われている。

ガリアの典礼は、シャルル・マーニュ(カール大帝)によって廃止された。彼は、789 年、教皇ハドリアヌス 1 世からグレゴリウス・サクラメンタリー(Gregorian Sacramentary)の贈り物を受け取ると、アーヘン(Aachen)の宮廷のフランク人の歌い手たちにこう命じた。

「聖グレゴリウスの起源に戻れ。なぜなら、お前たちが教会の聖歌を墮落させることは明らかだから。」

この命にもかかわらず、聖歌は、その中に多くのガリアの要素を伴ってローマに戻ったことを、私たちは見ている。そして、全般に、フランク人は不承不承ながら、ローマのミサを採用したのであった。彼らには、あまりに情趣がなく単調であるように思えたから。シャルルマーニュ自身は、ヨークの有名な典礼学者であったアルクインの助けを借りて、彼自らのためにローマ聖歌の何らかの改訂を行ったように思える。彼の死後、その仕事はメッスのアマラリウス(Amalarius of Metz)(850 年頃没)、ウァラフリド・ストラボ(Walafrid Strabo)(879 年没)とフラバヌス・マウルス(Hrabanus Maurus)(965 年没)によって続けられた。事実、メッスは、ガリアでのローマ典礼の中心地となった。

モサラベの典礼は、十一世紀まで生き残り、教皇アレクサンデル 2 世とグレゴリウス 7 世による廃止の後でさえ、いくつかのムーア人の地方では、十四世紀・十五世紀まで使用されている。

当時、トレド大聖堂やトレドの6つの教区の礼拝堂ではそれが許されていたし、今日でも、まだ使用されている。

ガリカニスム【gallicanisme ガリカン主義】

フランスのカトリック教会が、教皇権の管理下から神学的・政治的に独立しようと試みた傾向とその根拠となった思想。

フランスの古名ガリアに由来し、ガリカン教会主義、国家教会主義ともいう。その主旨は P.ピトゥーの《フランス教会の特権》(1594)やモー司教ボシュエの《フランス教会の聖職者宣言》(1682)に次の4項目として要約されている。

(1)国王は世俗的事項に関しては教皇の裁きを免れ、その臣下も忠誠義務を解除されない。

フランスの世俗事柄に関しては国王権力が教会に優先するという考え方のもとで、ヨーロッパ的規模の組織の一部を構成する国内の教会を、教皇の干渉を排除して君主の統制下におこうとする国家教会の動きのこと。

教皇庁と一線を画したフランス教会独自の主張である。

これには、聖職者たちの目を、ローマ教皇を頂点とするヨーロッパ的規模の教会組織からフランスへと向けさせる効果があった。

日本語では、ガリア主義、国家教会体制、フランス国民教会主義、フランス国民教会主義などと訳される。

転写あとがき

主日礼拝(2019年4月28日)が始まるかなり前に教会に到着した。

礼拝までの時間があるので、ベストリー(事務所兼用)の中の棚を眺めていたら、角の隅の棚に「横地司祭の大切な物」という透明ファイルに挟まれている十字架があった。

手に取ってみようとファイルを取り出すと、その後ろに隠されるように「聖週間の禮拝 ヨハネ横地諫」と書かれた古いノートが置いてありました。

中をペラペラとめくってみると丁寧な字で約50頁ほどの論説が万年筆で手書きされていました。

かねてより横地神父さんが礼拝に関して造詣の深い方であると尊敬しておりましたので、このノートを是非読みたいと信徒奉事者の方に申し出ましたら、快諾してくださいました。

ノートの古さから見ても、また参考文献にされた書籍の年代からみても相当前に書かれたものと思われます。

1945年終戦以前、内容の記述も1939年祈祷書に基づいているようですので、1940年司祭按手の前後頃であるようにも思われます。

貴重な教会の宝物のように感じ、ノートのままではもったいないと感じて、スキャナーで原資料を保存し、なおワープロで文章保管をすることにしました。

2019年5月6日(月) 転写完

たまたま「平成」から「令和」と元号が移るタイミングとなりましたが、そのことは勿論まったく今回の作業とは関係していません。

それよりも、今年の聖週間が終わり、ナザレ修女会での一連の礼拝儀式を終え、霊母より、「礼拝の所作、進行が曖昧になってきているので、今後のためにマニュアルを整えておいてください。」と指示をいただき、実のところ何から手をつけて良いのやら暗中模索の状態で困っていたタイミングでの今回の発見でした。

とてもとても不思議に感じ、聖霊の導きと感ぜざるを得ない心境となりました。

定年退職後満2年、このような恵み溢れた作業が与えられたことを深く感謝しています。

横地神父さんには、余計なことをしたとお叱りを受けるのかも知れませんが、本当に素晴らしい学びとまた大切な礼拝の手引きを整える強力なお知恵をいただいたこと、有難うございました。

天のみ国でのとこしえの平安をお祈りいたします。

在 主。

転写者 司祭 田光信幸

ヨハネ 横地 諫 司祭

生年月日 1907年 2月 23日

執事按手 1939年 10月 1日

司祭按手 1940年 9月 22日

勤務地：京城、釜山、大邱、京都聖アグネス、
東京聖バルナバ